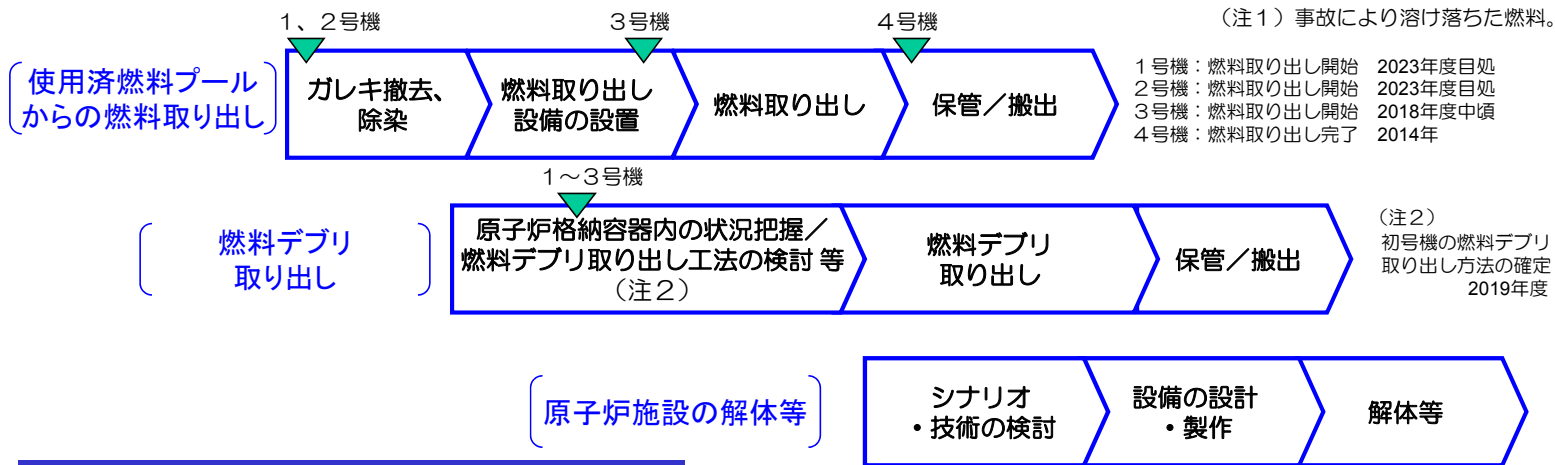


## 「廃炉」の主な作業項目と作業ステップ

2014年12月22日に4号機使用済燃料プールからの燃料取り出しが完了しました。引き続き、1～3号機の燃料取り出し、燃料デブリ(注1)取り出しの開始に向け順次作業を進めています。



## 使用済燃料プールからの燃料取り出しに向けて

2018年度中頃の3号機使用済燃料プールからの燃料取り出しに向けて、安全を最優先に作業を進めています。

原子炉建屋オペレーティングフロアの線量低減対策として、2016年6月に除染作業、2016年12月に遮へい体設置が完了しました。2017年1月より、燃料取り出し用カバーの設置作業を開始し、2018年2月に全ドーム屋根の設置が完了しました。



ドーム屋根設置状況  
(撮影日2018年2月21日)

## 「汚染水対策」の3つの基本方針と主な作業項目

～汚染水対策は、下記の3つの基本方針に基づき進めています～

### 方針1. 汚染源を取り除く

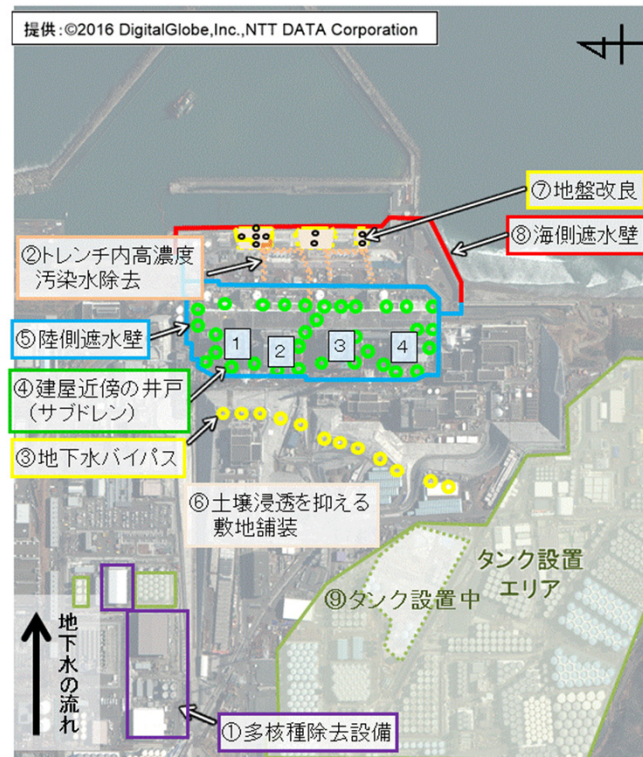
- ①多核種除去設備等による汚染水浄化
- ②トレンチ(注3)内の汚染水除去  
(注3) 配管などが入った地下トンネル。

### 方針2. 汚染源に水を近づけない

- ③地下水バイパスによる地下水汲み上げ
- ④建屋近傍の井戸での地下水汲み上げ
- ⑤凍土方式の陸側遮水壁の設置
- ⑥雨水の土壤浸透を抑える敷地舗装

### 方針3. 汚染水を漏らさない

- ⑦水ガラスによる地盤改良
- ⑧海側遮水壁の設置
- ⑨タンクの増設(溶接型へのリプレイス等)



## 多核種除去設備(ALPS)等

- ・タンク内の汚染水から放射性物質を除去しリスクを低減させます。
- ・多核種除去設備に加え、東京電力による多核種除去設備の増設(2014年9月から処理開始)、国の補助事業としての高性能多核種除去設備の設置(2014年10月から処理開始)により、汚染水(RO濃縮塩水)の処理を2015年5月に完了しました。
- ・多核種除去設備以外で処理したストロンチウム処理水について、多核種除去設備での処理を進めています。



(高性能多核種除去設備)

## 凍土方式の陸側遮水壁

- ・建屋を陸側遮水壁で囲み、建屋への地下水流入を抑制します。
- ・2016年3月より海側及び山側の一部、2016年6月より山側の95%の範囲の凍結を開始しました。残りの箇所についても段階的に凍結を進め、2017年8月に全ての箇所の凍結を開始しました。
- ・2018年3月、陸側遮水壁はほぼ全ての範囲で地中温度が0℃を下回ると共に、山側では4～5mの内外水位差が形成され、深部の一部を除き完成し、サブドレン・フェーシング等との重層的な汚染水対策により地下水位を安定的に制御し、建屋に地下水を近づけない水位管理システムが構築されたと考えています。また、3月7日に開催された汚染水処理対策委員会にて、これらの評価結果に基づき、陸側遮水壁が効果を発揮していることを確認して頂きました。



ブライン配管の設置状況

## 海側遮水壁

- ・1～4号機海側に遮水壁を設置し、汚染された地下水の海洋流出を防ぎます。
- ・遮水壁を構成する鋼管矢板の打設が2015年9月に、鋼管矢板の継手処理が2015年10月に完了し、海側遮水壁の閉合作業が終わりました。



(海側遮水壁)



## 取り組みの状況

- ◆ 1～3号機の原子炉・格納容器の温度は、この1か月、約10℃～約20℃※<sup>1</sup>で推移しています。また、原子炉建屋からの放射性物質の放出量等については有意な変動がなく※<sup>2</sup>、総合的に冷温停止状態を維持していると判断しています。
- ※<sup>1</sup> 号機や温度計の位置により多少異なります。
- ※<sup>2</sup> 1～4号機原子炉建屋からの放出による被ばく線量への影響は、2018年2月の評価では敷地境界で年間0.00069mSv/年未満です。なお、自然放射線による被ばく線量は年間約2.1mSv/年（日本平均）です。

### サブドレン処理系統容量の増加

重層的な汚染水対策の一つとして、降雨の土壤浸透を抑える敷地舗装（フェーシング）等と併せてサブドレン処理系統を強化するための設備の設置を行っており、3月中に供用を開始するための準備が完了する予定です。これにより、処理容量を増加させ信頼性を向上します。また特に、地下水の汲み上げ量が増加する大雨時においても、護岸エリアから汲み上げた地下水の建屋への移送量を低減すると共に、サブドレン処理系統の稼働率を向上し地下水位を安定的に維持することで、汚染水の発生量を抑制します。

今後、これらの設備を確実に運用してまいります。

### 陸側遮水壁の評価と今後の汚染水対策

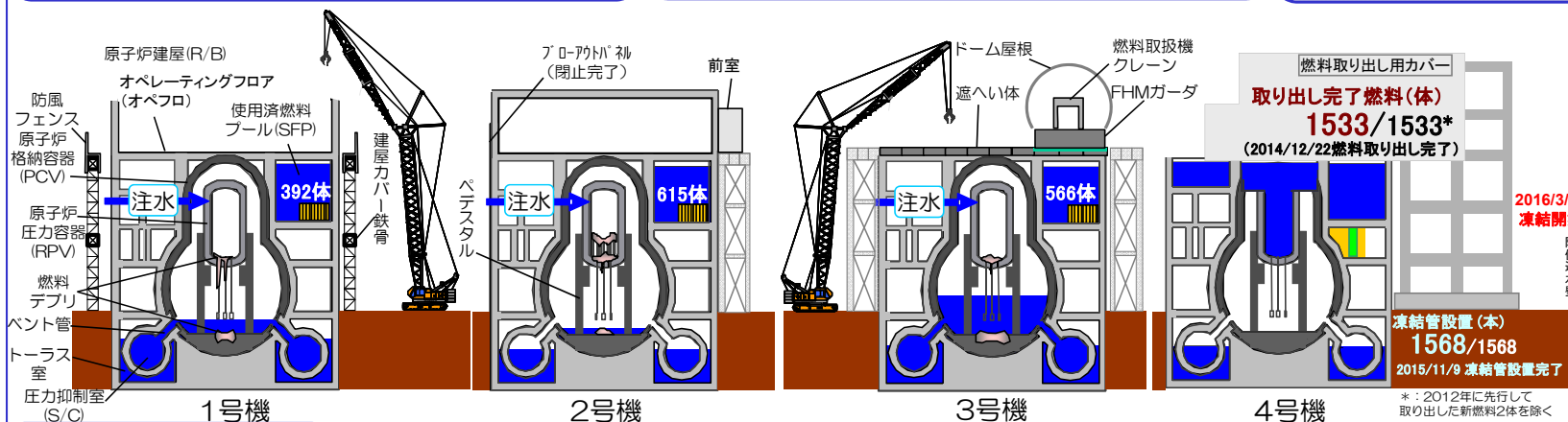
3月7日に開催された汚染水処理対策委員会にて、陸側遮水壁について、地下水の遮水効果が明確に認められ、サブドレン等の機能と併せ、地下水を安定的に制御し建屋に地下水を近づけない水位管理システムが構築されており、これにより汚染水の発生を大幅に抑制することが可能となったとの評価が得られました。今後、建屋滞留水処理やサブドレン水位低下などの重層的な対策に継続して取り組むと共に、屋根損傷部からの雨水流入を抑制する雨水対策や、埋設構造物等を介して建屋へ流入する経路の調査・対策を進め、汚染水発生量の更なる低減に向けて取り組みます。

### 2号機原子炉建屋西側開口の設置

2号機では、使用済燃料プール内の燃料取り出しに向けて、周辺環境に影響を与えないための方策等を検討するため、オペフロ内で線量・ダスト濃度等を測定する調査を計画しています。この度、準備が整ったことから、オペフロ内へアクセスするための開口設置作業を前室内で4月より開始します。なお、開口の設置作業にあたっては、室内空気の浄化や飛散防止剤の散布等により、ダストの飛散を抑制します。引き続き、安全を最優先に作業を進めてまいります。



原子炉建屋西側の状況



### 水晶体の線量管理方法の見直しについて

眼の水晶体は、放射線への感受性の高い組織として知られており、国際放射線防護委員会の勧告※を踏まえ、自主運用として4月から管理値を年間50mSvに引き下げます。これにより、発電所で働く作業者の安全性の向上を図ります。

※最新の疫学的知見を踏まえ、水晶体の線量限度の引き下げ等を勧告

### 3号機燃料取り出しの対応状況

2018年度中頃の3号機使用済燃料プールからの燃料取り出しに向けて、試運転を進めています。今後、燃料取り出しの操作技量習熟に向けて実機による燃料取扱訓練やガレキ撤去を行い、燃料取り出しに備えます。

### 大熊分析・研究センター施設管理棟の運用開始

日本原子力研究開発機構の大熊分析・研究センター施設管理棟は3月15日に開所式を行い、運用を開始しました。引き続き、第1棟の建設工事及び第2棟の詳細設計を進めると共に、施設管理棟ではこれら施設の運用開始にむけて、分析にかかる計画・手順の検討や分析作業の訓練等を実施する予定です。

### A排水路の付替え完了

多核種除去設備等を設置しているエリアの雨水等は、A排水路を通じて港湾外へ排水していましたが、港湾外へ排水される水のリスクを低減するため、3月26日に排水先を港湾内に変更しました。これにより、港湾内で排水を管理します。なお、モニタリングを実施し、現時点で有意な変動は確認されていません。



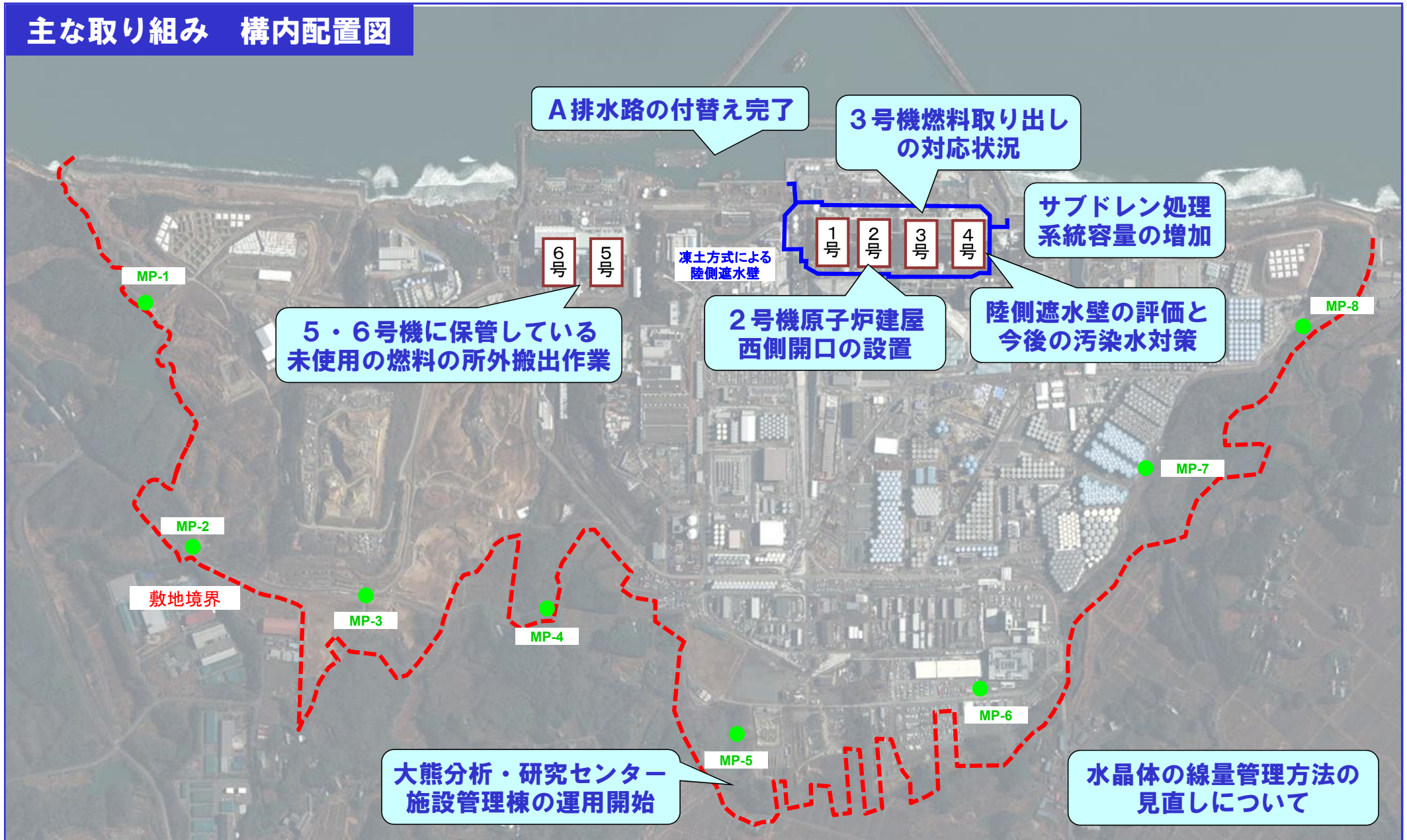
工事の状況

### 5・6号機に保管している未使用の燃料の所外搬出作業

5・6号機には、使用していない燃料（以下、「新燃料」という。）を596体保管しています。福島第一廃止措置等の準備を計画的に進めるため、新燃料の一部（360体）を2018年度より発電所構外にある燃料加工メーカーへ搬出することを計画しています。なお、搬出予定の燃料は、発電所構内で除染を行うことから、搬出に伴う環境への影響はありません。今後、準備が整い次第作業を進め、地元自治体等へ必要な連絡をした上で搬出を行います。



# 主な取り組み 構内配置図



提供: ©2016 DigitalGlobe, Inc., NTT DATA Corporation

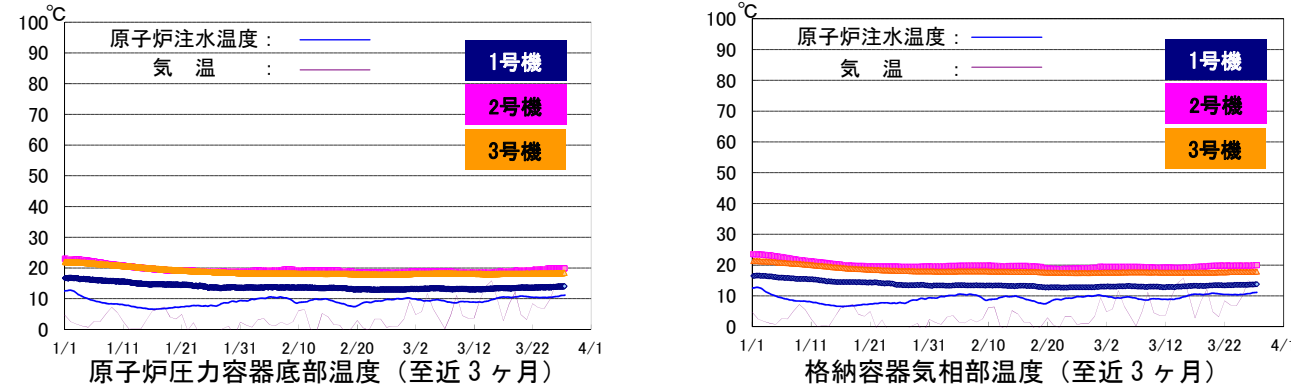
※モニタリングポスト (MP-1~MP-8) のデータ  
 敷地境界周辺の空間線量率を測定しているモニタリングポスト(MP)のデータ (10分値) は0.404  $\mu$ Sv/h~1.757  $\mu$ Sv/h (2018/2/28~2018/3/27)。  
 MP-2~MP-8については、空間線量率の変動をより正確に測定することを目的に、2012/2/10~4/18に、環境改善 (森林の伐採、表土の除去、遮へい壁の設置) の工事を実施しました。  
 環境改善工事により、発電所敷地内と比較して、MP周辺の空間線量率だけが低くなっています。  
 MP-6については、さらなる森林伐採等を実施した結果、遮へい壁外側の空間線量率が大幅に低減したことから、2013/7/10~7/11にかけて遮へい壁を撤去しました。



## I. 原子炉の状態の確認

### 1. 原子炉内の温度

注水冷却を継続することにより、原子炉圧力容器底部温度、格納容器気相部温度は、号機や温度計の位置によって異なるものの、至近1ヶ月において、約10～20度で推移。

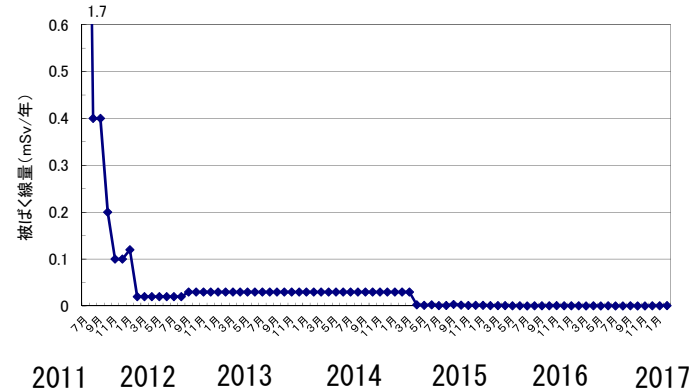


※トレンドグラフは複数点計測している温度データの内、一部のデータを例示

### 2. 原子炉建屋からの放射性物質の放出

2018年2月において、1～4号機原子炉建屋から新たに放出される放射性物質による、敷地境界における空气中放射性物質濃度は、Cs-134 約  $8.4 \times 10^{-12}$  ベクレル/cm<sup>3</sup> 及び Cs-137 約  $6.1 \times 10^{-11}$  ベクレル/cm<sup>3</sup> と評価。放出された放射性物質による敷地境界上の被ばく線量は0.00069mSv/年未満と評価。

1～4号機原子炉建屋からの放射性物質（セシウム）による敷地境界における年間被ばく線量評価



(参考)

※周辺監視区域外の空气中の濃度限度：

[Cs-134]： $2 \times 10^{-5}$  ベクレル/cm<sup>3</sup>、

[Cs-137]： $3 \times 10^{-5}$  ベクレル/cm<sup>3</sup>

※モニタリングポスト（MP1～MP8）のデータ

敷地境界周辺の空間線量率を測定しているモニタリングポスト（MP）のデータ（10分値）は0.404μSv/h～1.757μSv/h（2018/2/28～3/27）MP2～MP8 空間線量率の変動をより正確に測定することを目的に、環境改善（周辺の樹木伐採、表土の除去、遮へい設置）を実施済み。

(注) 線量評価については、施設運営計画と月例報告とで異なる計算式及び係数を使用していたことから、2012年9月に評価方法の統一を図っている。4号機については、使用済燃料プールからの燃料取り出し作業を踏まえ、2013年11月より評価対象に追加している。2015年度より連続ダストモニタの値を考慮した評価手法に変更し、公表を翌月としている。

### 3. その他の指標

格納容器内圧力や、臨界監視のための格納容器放射性物質濃度（Xe-135）等のパラメータについても有意な変動はなく、冷却状態の異常や臨界等の兆候は確認されていない。

以上より、総合的に冷温停止状態を維持しており原子炉が安定状態にあることが確認されている。

## II. 分野別の進捗状況

### 1. 汚染水対策

～地下水流入により増え続ける滞留水について、流入を抑制するための抜本的な対策を図るとともに、水処理施設の除染能力の向上、汚染水管理のための施設を整備～

#### ➤ 地下水バイパスの運用状況

- 2014/4/9より12本ある地下水バイパス揚水井の各ポンプを順次稼働し、地下水の汲み上げを開始。2014/5/21より内閣府廃炉・汚染水対策現地事務所職員の立ち会いの下、排水を開始。2018/3/27までに362,716m<sup>3</sup>を排水。汲み上げた地下水は、一時貯留タンクに貯留し、水質が運用目標未満であることを東京電力及び第三者機関にて確認した上で排水。
- ポンプの運転状況を確認しつつ、適宜点検・清掃を実施中。

#### ➤ サブドレン他水処理施設の状態について

- 建屋へ流れ込む地下水の量を減らすため、建屋周辺の井戸（サブドレン）からの地下水の汲み上げを2015/9/3より開始。汲み上げた地下水は専用の設備により浄化し、2015/9/14より排水を開始。2018/3/27までに509,368m<sup>3</sup>を排水。浄化した地下水は水質が運用目標未満であることを東京電力及び第三者機関にて確認した上で排水。
- 海側遮水壁の閉合以降、地下水ドレンポンド水位が上昇したことから2015/11/5より汲み上げを開始。2018/3/28までに約173,424m<sup>3</sup>を汲み上げ。地下水ドレンからタービン建屋へ約10m<sup>3</sup>/日未満移送（2018/2/22～2018/3/21の平均）。
- 重層的な汚染水対策の一つとして、降雨の土壌浸透を抑える敷地舗装（フェーシング）等と併せてサブドレン処理システムを強化するための設備の設置を行っており、3月中に供用を開始するための準備が完了する予定。これにより、処理容量を増加させ信頼性を向上。
- また特に、地下水の汲み上げ量が増加する大雨時においても、護岸エリアから汲み上げた地下水の建屋への移送量を低減すると共に、サブドレン処理システムの稼働率を向上し地下水位を安定的に維持することで、汚染水の発生量を抑制。
- 今後、これらの設備を確実に運用していく。
- サブドレンの安定した汲み上げ量確保を目的とし、サブドレンピットの増強・復旧工事を実施中。なお、工事が完了したピットより運用開始（運用開始数：増強ピット12/15、復旧ピット0/4）。
- サブドレン移送配管清掃時の汲み上げ停止の解消を目的とし、移送配管を二重化するため、配管・付帯設備設置中。
- サブドレン稼働によりサブドレン水位がT.P. 3.0mを下回ると、建屋への流入量も150m<sup>3</sup>/日を下回ることが多くなっているが、降雨による流入量の増加も認められる。

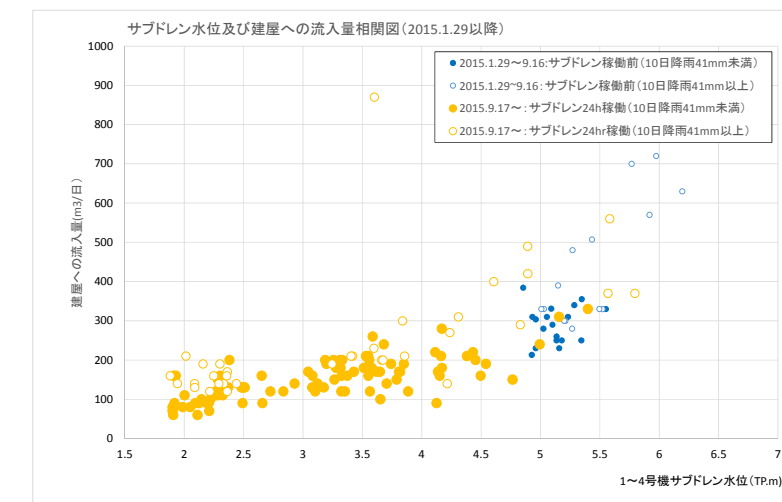


図1：建屋への地下水・雨水等流入量と1～4号機サブドレン水位の相関

#### ➤ 陸側遮水壁の造成状況

- 陸側遮水壁は、北側と南側で凍土の成長を制御する維持管理運転を、2017年5月より実施中。また、凍土が十分に造成されたことから、東側についても2017年11月に維持管理運転を開始。
- 3月7日に開催された汚染水処理対策委員会にて、陸側遮水壁について、地下水の遮水効果が明確に認められ、サブドレン等の機能と併せ、地下水を安定的に制御し建屋に地下水を近づけない水位管理システムが構築されており、これにより汚染水の発生を大幅に抑制することが可能となったとの評価を得た。
- 今後、建屋滞留水処理やサブドレン水位低下などの重層的な対策に継続して取り組むと共に、屋根損傷部からの雨水流入を抑制する雨水対策や、埋設構造物等を介して建屋へ流入する経路の調査・対策を進め、汚染水発生量の更なる低減に向けて取り組む。



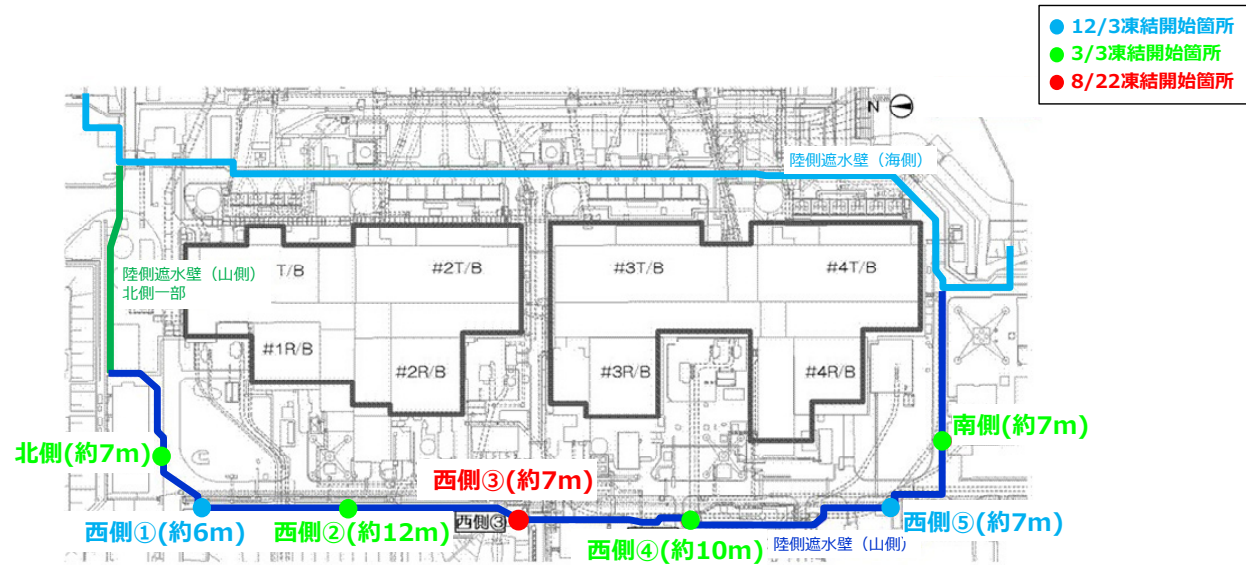


図2：陸側遮水壁(山側)の閉合箇所

➤ 多核種除去設備の運用状況

- 多核種除去設備（既設・高性能）は放射性物質を含む水を用いたホット試験を実施中（既設 A 系：2013/3/30～、既設 B 系：2013/6/13～、既設 C 系：2013/9/27～、高性能：2014/10/18～）。多核種除去設備（増設）は2017/10/16より本格運転開始。
  - これまでに既設多核種除去設備で約 370,000m<sup>3</sup>、増設多核種除去設備で約 418,000m<sup>3</sup>、高性能多核種除去設備で約 103,000m<sup>3</sup>を処理（3/22 時点、放射性物質濃度が高い既設 B 系出口水が貯蔵された J1 (D) タンク貯蔵分約 9,500m<sup>3</sup>を含む）。
  - Sr 処理水のリスクを低減するため、多核種除去設備（既設・増設・高性能）にて処理を実施中（既設：2015/12/4～、増設：2015/5/27～、高性能：2015/4/15～）。これまでに 431,000m<sup>3</sup>を処理（3/22 時点）。
- タンク内にある汚染水のリスク低減に向けて
- セシウム吸着装置（KURION）でのストロンチウム除去（2015/1/6～）、第二セシウム吸着装置（SARRY）でのストロンチウム除去（2014/12/26～）を実施中。3/22 時点で約 440,000m<sup>3</sup>を処理。
- タンクエリアにおける対策
- 汚染水タンクエリアに降雨し堰内に溜まった雨水のうち、基準を満たさない雨水について、2014/5/21より雨水処理装置を用い放射性物質を除去し敷地内に散水（2018/3/26 時点で累計 97,508m<sup>3</sup>）。

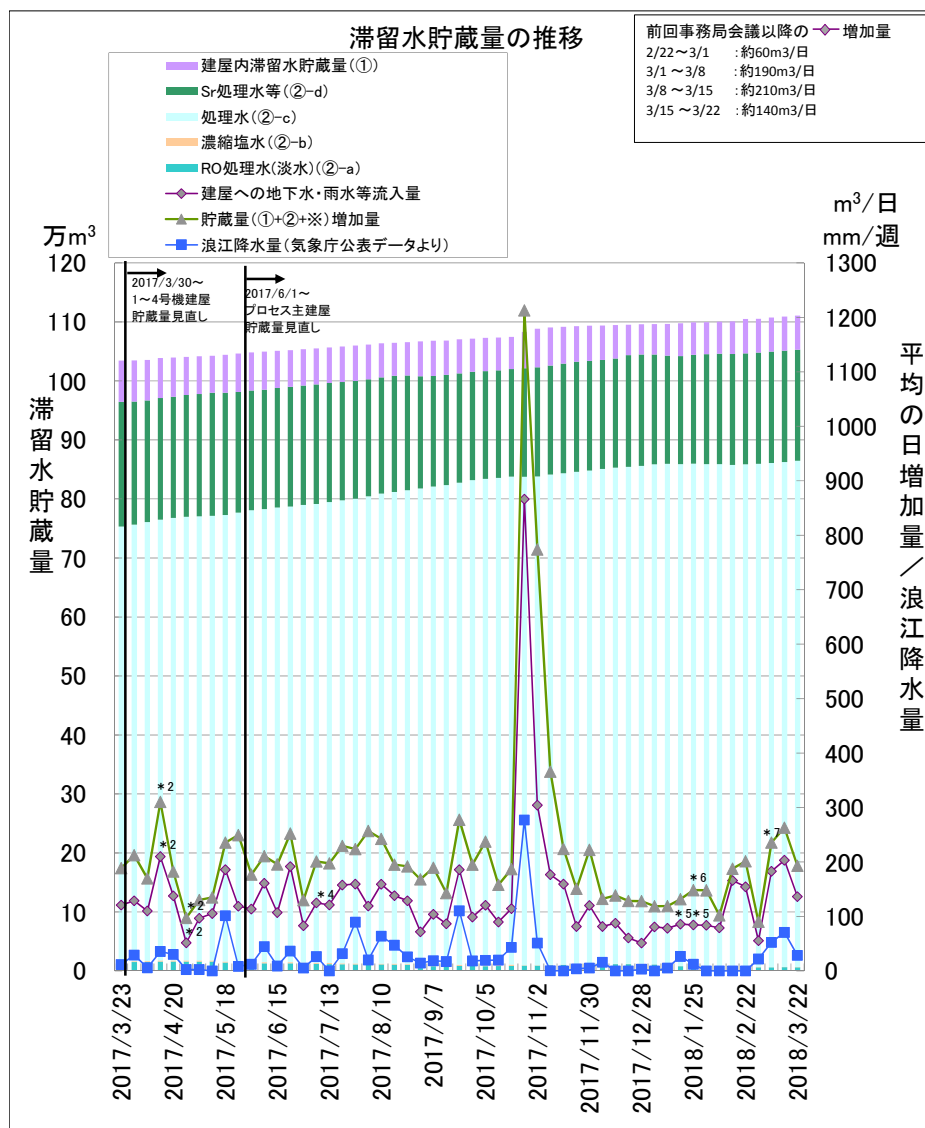
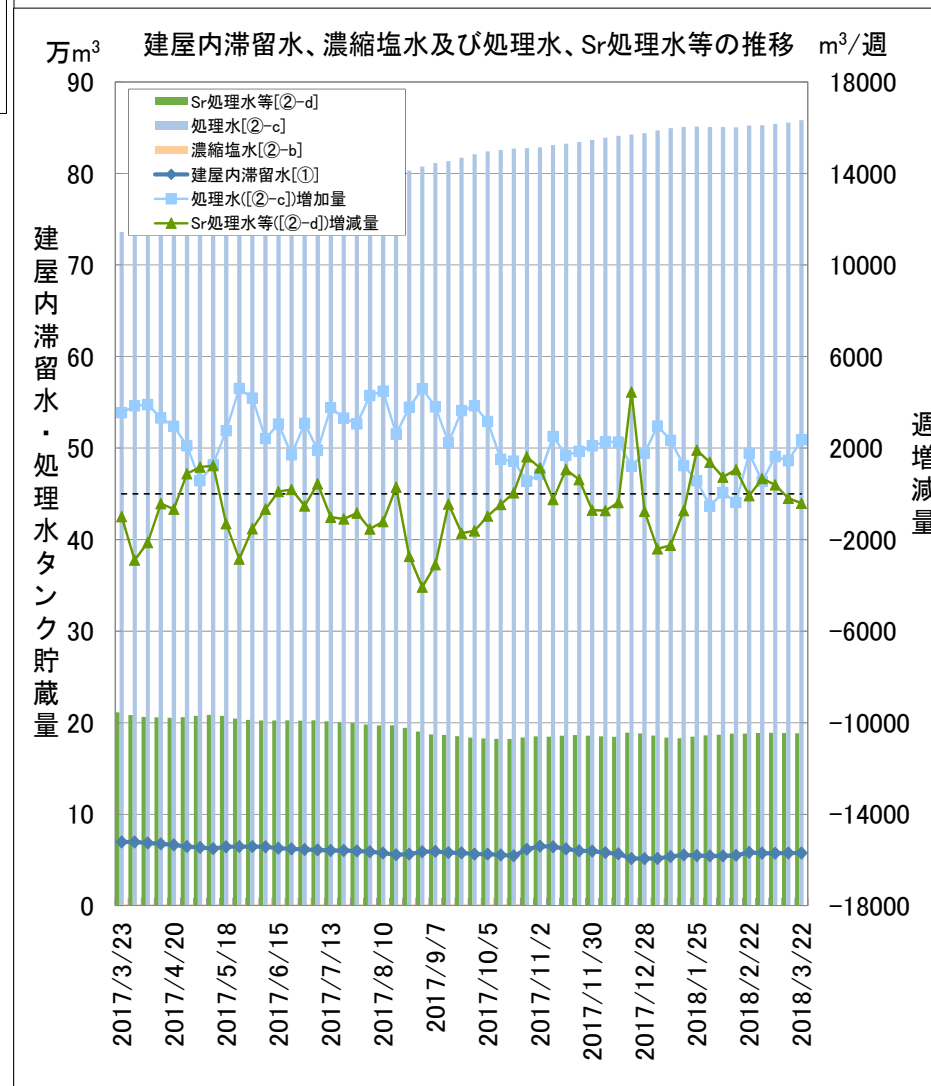


図3：滞留水の貯蔵状況



2018/3/22 現在

- \*1：水位計 0%以上の水量
- \*2：集中 RW 建屋の貯蔵量算出に必要な水位に応じた断面積（評価値）の不確かさによるものと推定。2017/6/1の集計値以降、集中 RW 建屋の貯蔵量算出に必要な水位に応じた断面積（評価値）を見直し
- \*3：貯蔵量増加量の精度向上として、2017/2/9より算出方法を以下の通り見直し。（2018/3/1見直し実施）  
〔（建屋への地下水・雨水等流入量）+（その他移送量）+（ALPS 薬液注入量）〕
- \*4：2017/7/5に実施した調査結果から、1号機 T/B 未調査エリアの水量が想定水量よりも少ないことが判明したため補正
- \*5：残水エリアへ流入した地下水・雨水等流入量を加味して再評価（2018/1/18、1/25）。
- \*6：SARRY 逆洗水を「貯蔵量増加量」に加味していたことから見直し。（2018/1/25）
- \*7：右記評価期間は、建屋水位計の校正の影響を含む（2018/3/1～3/8：3号機タービン建屋）



- 多核種除去設備 クロスフローフィルタドレンラインからの滴下について
  - ・ 2018/3/2 多核種設備 C 系の鉄共沈処理プロセスにおける、クロスフローフィルタ(以下、CFF と言う。)ドレンラインの配管溶接部より滴下(1 滴/3 秒)及び水溜り(2cm×2cm×1mm)を確認。
  - ・ 水溜りは多核種除去設備建屋内の CFF スキッド内に溜まっており、建屋外への流出はない。
- G3 西タンクエリア堰内雨水の外堰への漏えいについて
  - ・ 2018/3/15 G3 西タンクエリア堰内雨水移送水が当該エリアの内堰と外堰の間に漏えいし、その一部床面開口部より地面に一部浸透。漏えい量のうち、最大で約 300L の水が開口部へ流入したものと推定。
  - ・ 堰内への漏えい量は約 6.5m<sup>3</sup>であり、外堰内に溜まっている、構外への漏えいはない。漏えい水は回収済。
  - ・ 開口部調査の結果、開口部から地表に浸透した土壌の表面線量率は、過去に汚染土壌回収を実施した表面線量率のしきい値未満であることを確認。
  - ・ 開口部について、蓋をし、水が入らないよう養生を実施。

## 2. 使用済燃料プールからの燃料取り出し

～耐震・安全性に万全を期しながらプール燃料取り出しに向けた作業を着実に推進。4号機プール燃料取り出しは2013/11/18に開始、2014/12/22に完了～

- 1号機使用済燃料取り出しに向けた主要工事
  - ・ ガレキ撤去作業時のダスト飛散を抑制するための防風フェンスの設置を 2017/10/31 に開始し、2017/12/19 に完了。
  - ・ 1号機使用済燃料プールからの燃料取り出しに向けて、オペフロ北側のガレキ撤去を1月22日より開始。
  - ・ 吸引装置によるガレキ撤去作業を慎重に進めており、放射性物質濃度を監視している敷地境界付近や構内のダストモニタに有意な変動がないことを確認。
  - ・ 撤去したガレキは、その線量に応じて固体廃棄物貯蔵庫等の保管エリアに保管。
  - ・ 今後実施するオペフロ南側ガレキ撤去に際し、同エリアにある使用済燃料プールにガレキ等が落下し、燃料等を損傷させないようにするため、使用済燃料プールの保護を行う。その作業性を確保するため、外周鉄骨の一部撤去を計画中。
- 2号機使用済燃料取り出しに向けた主要工事
  - ・ 2号機では、使用済燃料プール内の燃料取り出しに向けて、周辺環境に影響を与えないための方策等を検討するため、オペフロ内で線量・ダスト濃度等を測定する調査を計画。
  - ・ この度、準備が整ったことから、オペフロ内へアクセスするための開口設置作業を前室内で4月より開始予定。
  - ・ なお、開口の設置作業にあたっては、室内空気の浄化や飛散防止剤の散布等により、ダストの飛散を抑制。
- 3号機使用済燃料取り出しに向けた主要工事
  - ・ 2018/2/23 に3号機燃料取り出し用カバー全ドーム屋根の設置を完了。
  - ・ 2018年度中頃の3号機使用済燃料プールからの燃料取り出しに向けて、試運転を進めている。
  - ・ 今後、燃料取り出しの操作技量習熟に向けて実機による燃料取扱訓練やガレキ撤去を行い、燃料取り出しに備える。

## 3. 固体廃棄物の保管管理、処理・処分、原子炉施設の廃止措置に向けた計画

～廃棄物発生量低減・保管適正化の推進、適切かつ安全な保管と処理・処分に向けた研究開発～

- ガレキ・伐採木の管理状況
  - ・ 2018年2月末時点でのコンクリート、金属ガレキの保管総量は約 231,500m<sup>3</sup>(1月末との比較: +4,600m<sup>3</sup>)(エリア占有率: 65%)。伐採木の保管総量は約 133,900m<sup>3</sup>(1月末との比較: +100m<sup>3</sup>)(エリア占有率: 76%)。保護衣の保管総量は約 60,900m<sup>3</sup>(1月末との比較: +1,600m<sup>3</sup>)(エリア占有率: 86%)。ガレキの増減は、主にタンク関連設置工事、構内一般廃棄物、一時保管エリア J から瓦礫の受入、構内所在不明物品による増加。使用済保護衣の増減は、使用済保護衣等の受入による増加。
- 水処理二次廃棄物の管理状況
  - ・ 2018/3/1 時点での廃スラッジの保管状況は 597m<sup>3</sup>(占有率: 85%)。濃縮廃液の保管状況は 9,330m<sup>3</sup>(占有率: 87%)。使用済ベッセル・多核種除去設備の保管容器(HIC)等の保管総量は 3,913 体(占有率: 61%)。
- 大熊分析・研究センター施設管理棟の運用開始について
  - ・ 日本原子力研究開発機構の大熊分析・研究センター施設管理棟は 2018年3月15日に開所式を行い、運用を開始。
  - ・ 引き続き、第1棟の建設工事及び第2棟の詳細設計を進めるとともに、施設管理棟ではこれら施設の運用開始にむけて、分析にかかる計画・手順の検討や分析作業の訓練等を実施する予定。

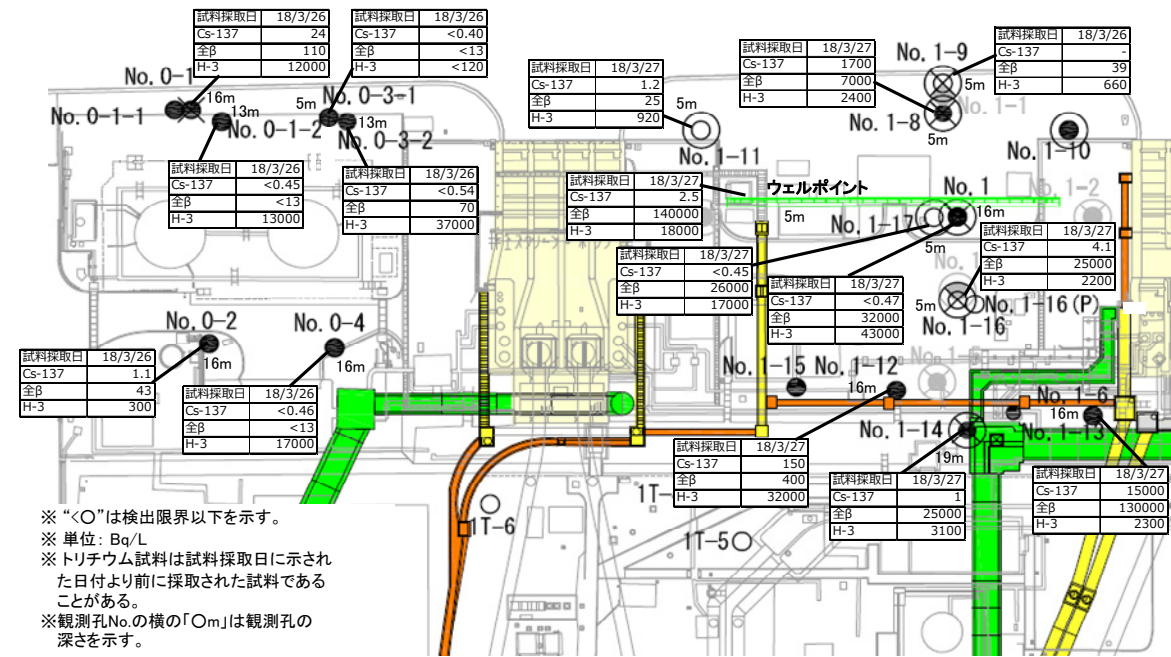
## 4. 放射線量低減・汚染拡大防止

～敷地外への放射線影響を可能な限り低くするため、敷地境界における実効線量低減や港湾内の水の浄化～

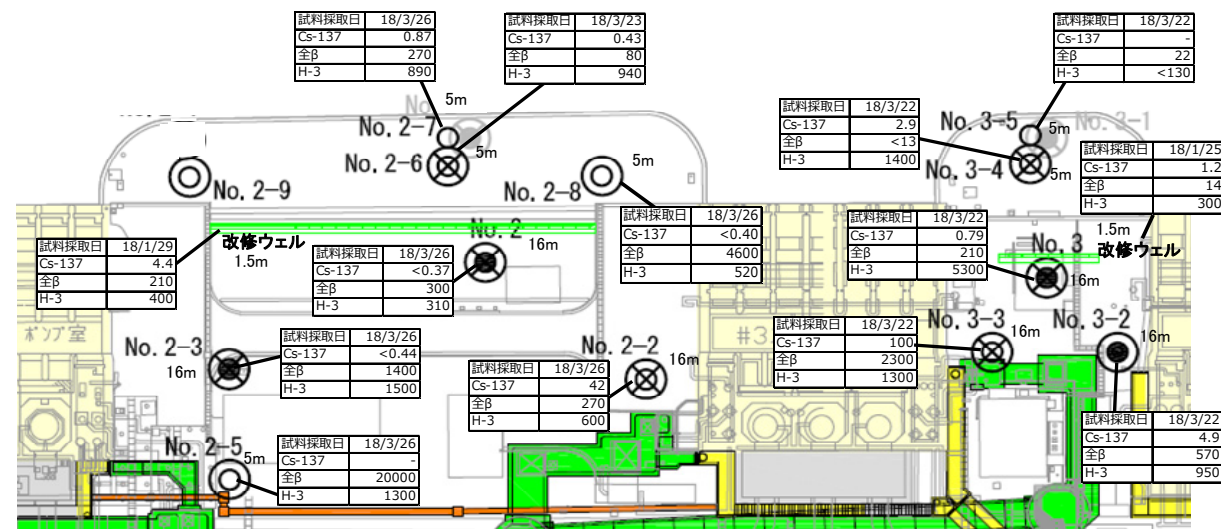
- 1～4号機タービン建屋東側における地下水・海水の状況
  - ・ No. 1-6 で H-3 濃度は 2017. 11 より 2,000Bq/l 程度から 15,000Bq/l 程度まで上昇したが 2018. 3 より低下し、現在 3,000Bq/l 程度となっている。
  - ・ No. 1-8 で H-3 濃度は 2017. 12 より 900Bq/l 程度から上昇傾向にあり、現在 2,400Bq/l 程度となっている。
  - ・ No. 1-9 で H-3 濃度は 2017. 10 より 1,500Bq/l まで上昇後低下し、現在 700Bq/l 程度となっている。
  - ・ No. 1-17 で H-3 濃度は 2017. 12 より 30,000Bq/l 程度から低下傾向にあり、現在 20,000Bq/l 程度となっている。2013/8/15 より地下水汲み上げを継続(1、2号機取水口間ウェルポイント: 2013/8/15～2015/10/13, 10/24～、改修ウェル: 2015/10/14～23)。
  - ・ No. 2-3 で H-3 濃度は 2017. 11 より 1,000Bq/l 程度から上昇し、現在 1,500Bq/l 程度となっている。全β濃度は 2017. 12 より 600Bq/l 程度から上昇し、現在 1,500Bq/l 程度となっている。
  - ・ No. 2-5 で H-3 濃度は 2017. 11 より 700Bq/l 程度から上昇し、現在 1,500Bq/l 程度となっている。2013/12/18 より地下水汲み上げを継続(2、3号機取水口間ウェルポイント: 2013/12/18～2015/10/13、改修ウェル: 2015/10/14～)。
  - ・ 3、4号機取水口間護岸付近において、2015/4/1 より地下水汲み上げを継続(3、4号機取水口間ウェルポイント: 2015/4/1～9/16、改修ウェル: 2015/9/17～)。
  - ・ 1～4号機取水路開渠内エリアの海水放射性物質濃度は、告示濃度未満で推移しているが、大雨時にセシウム 137 濃度、ストロンチウム 90 濃度の上昇が見られる。海側遮水壁鋼管矢板打設・継手処理の完了後、濃度の低下が見られる。位置変更のために新しいシルトフェンスを設置した 2017/1/25 以降セシウム 137 濃度の上昇が見られる。
  - ・ 港湾内エリアの海水放射性物質濃度は、告示濃度未満で推移しているが、大雨時にセシウム 137 濃度、ストロンチウム 90 濃度の上昇が見られる。海側遮水壁鋼管矢板打設・継手処理の完了後、濃度低下が見られる。
  - ・ 港湾外エリアの海水放射性物質濃度は、海側遮水壁鋼管矢板打設・継手処理の完了後、セシウム 137 濃度、ストロンチウム 90 濃度の低下が見られ、告示濃度未満で推移していて変化は見ら



れない。



<1号機取水口北側、1、2号機取水口間>



<2、3号機取水口間、3、4号機取水口間>

図4:タービン建屋東側の地下水濃度

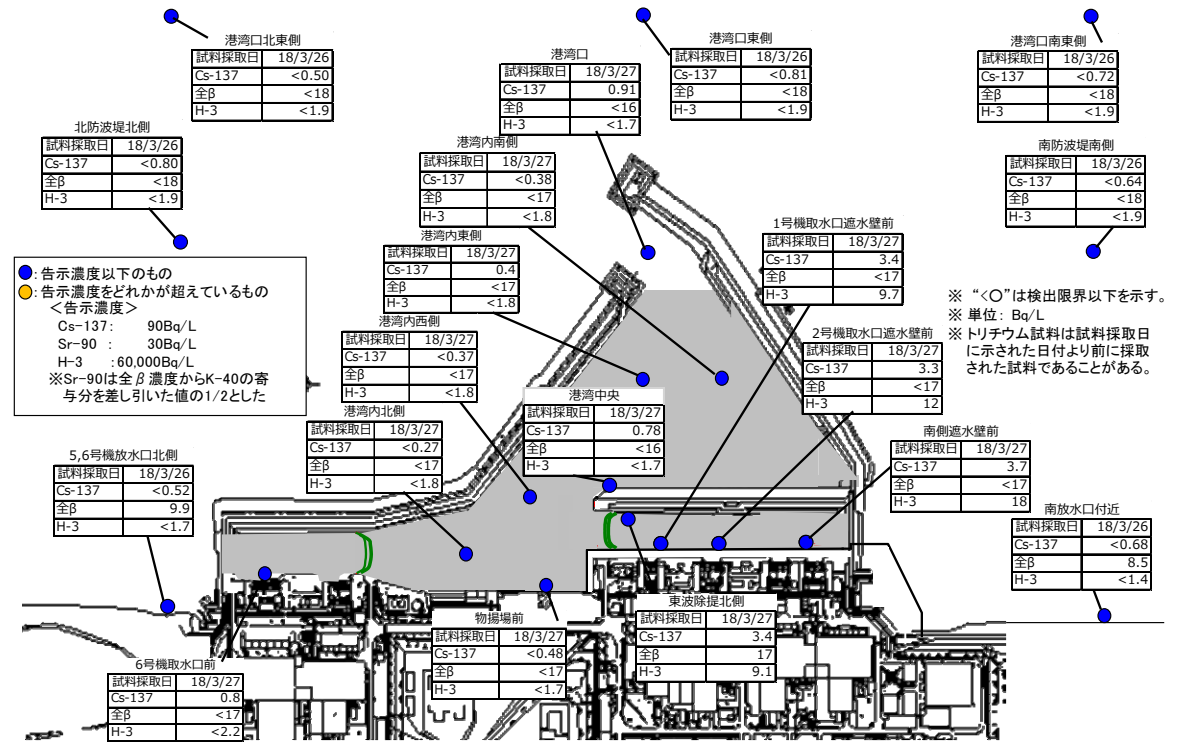


図5: 港湾周辺の海水濃度

➤ A排水路付替工事完了について

- ・多核種除去設備等を設置しているエリアの雨水等は、A排水路を通じて港湾外へ排水していたが、港湾外へ排水される水のリスクを低減するため、3月26日に排水先を港湾内に変更。これにより、港湾内で排水を管理。
- ・なお、モニタリングを実施し、現時点で有意な変動は確認されていない。

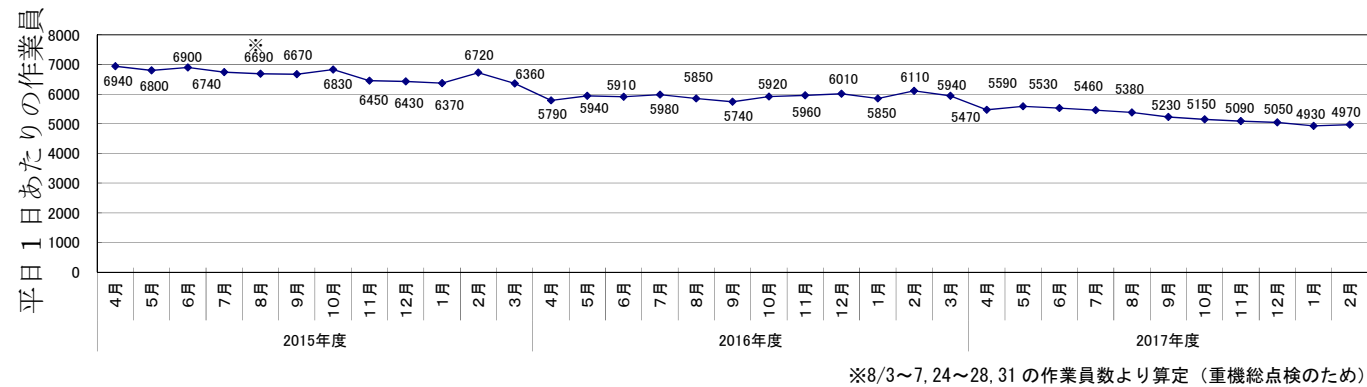
5. 必要作業員数の見通し、労働環境、労働条件の改善に向けた取組

～作業員の被ばく線量管理を確実に実施しながら長期に亘って要員を確保。また、現場のニーズを把握しながら継続的に作業環境や労働条件を改善～

➤ 要員管理

- ・1ヶ月間のうち1日でも従事者登録されている人数（協力企業作業員及び東電社員）は、2017年11月～2018年1月の1ヶ月あたりの平均が約11,000人。実際に業務に従事した人数は1ヶ月あたりの平均で約8,300人であり、ある程度余裕のある範囲で従事登録者が確保されている。
- ・2018年4月の作業に想定される人数（協力企業作業員及び東電社員）は、平日1日あたり4,470人程度と想定され、現時点で要員の不足が生じていないことを主要元請企業に確認。なお、2015年度以降の各月の平日1日あたりの平均作業員数（実績値）は約4,900～7,000人規模で推移（図6参照）。
- ・福島県内・県外の作業員が共に増加。2月時点における地元雇用率（協力企業作業員及び東電社員）は横ばいで約60%。
- ・2014年度の月平均線量は約0.81mSv、2015年度の月平均線量は約0.59mSv、2016年度の月平均線量は約0.39mSvである。（参考：年間被ばく線量目安20mSv/年≒1.7mSv/月）
- ・大半の作業員の被ばく線量は線量限度に対し大きく余裕のある状況である。





※8/3~7, 24~28, 31の作業員数より算定(重機総点検のため)

図6：2015年度以降各月の平日1日あたりの平均作業員数(実績値)の推移

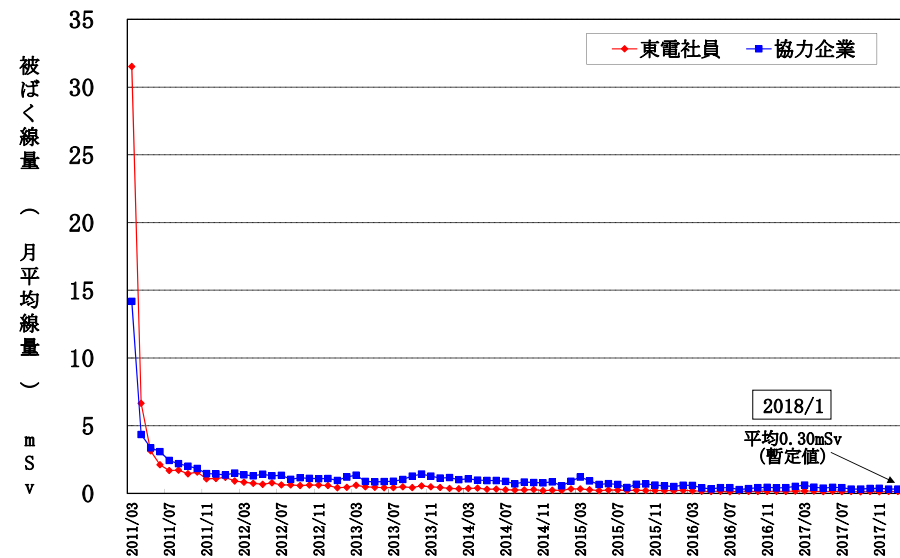


図7：作業員の月別個人被ばく線量の推移(月平均線量)  
(2011/3以降の月別被ばく線量)

## 6. 5, 6号機の状況

### ➤ 5, 6号機使用済燃料の保管状況

- ・ 5号機は、原子炉から燃料の取り出し作業を2015年6月に完了。使用済燃料プール(貯蔵容量1,590体)内に使用済燃料1,374体、新燃料168体を保管。
- ・ 6号機は、原子炉から燃料の取り出し作業を2013年11月に完了。使用済燃料プール(貯蔵容量1,654体)内に使用済燃料1,456体、新燃料198体(うち180体は4号機使用済燃料プールより移送)、新燃料貯蔵庫(貯蔵容量230体)に新燃料230体を保管。

### ➤ 5, 6号機滞留水処理の状況

- ・ 5, 6号機建屋内の滞留水は、6号機タービン建屋から屋外のタンクに移送後、油分分離、RO処理を行い、放射能濃度を確認し散水を実施している。

### ➤ 5, 6号機に保管している未使用の燃料の所外搬出作業

- ・ 5・6号機には、使用していない燃料(以下、「新燃料」という。)を596体を保管。
- ・ 福島第一廃止措置等の準備を計画的に進めるため、新燃料の一部(360体)を2018年度より発電所構外にある燃料加工メーカーへ搬出することを計画。
- ・ 搬出予定の燃料は、発電所構内で除染を行うことから、搬出に伴う環境への影響はない。
- ・ 今後、準備が整い次第作業を進め、地元自治体等へ必要な連絡をした上で搬出を行う。

### ➤ インフルエンザ・ノロウイルス感染予防・拡大防止対策

- ・ 11月よりインフルエンザ・ノロウイルス対策を実施。対策の一環として、協力企業作業員の方を対象に福島第一(2017/10/25~11/24)及び近隣医療機関(2017/11/1~2018/1/31)にて、インフルエンザ予防接種を無料(東京電力HDが費用負担)で実施。2018/1/31までに合計6,864人が接種を受けた。その他、日々の感染予防・拡大防止策(検温・健康チェック、感染状況の把握)、感染疑い者発生後の対応(速やかな退所と入構管理、職場でのマスク着用徹底等)等、周知徹底し、対策を進めている。

### ➤ インフルエンザ・ノロウイルスの発生状況

- ・ 2018年第12週(2018/3/19~3/25)までのインフルエンザ感染者301人、ノロウイルス感染者11人。なお、昨シーズン同時期の累計は、インフルエンザ感染者, 391人、ノロウイルス感染者16人。

### ➤ 水晶体の線量管理方法の見直しについて

- ・ 眼の水晶体は、放射線への感受性の高い組織として知られており、国際放射線防護委員会の勧告\*を踏まえ、自主運用として4月から管理値を年間50mSvに引き下げる。
- ・ これにより、発電所で働く作業員の安全性の向上を図る。

※最新の疫学的知見を踏まえ、水晶体の線量限度の引き下げ等を勧告



# 港湾内における海水モニタリングの状況 (H25年の最高値と直近の比較)

海側遮水壁

シルトフェンス

『最高値』→『直近(3/19-3/27採取)』の順、単位(ベクレル/リットル)、検出限界値未満以下の場合はND(検出限界値)と表記

出典: 東京電力ホームページ福島第一原子力発電所周辺の放射性物質の分析結果

<http://www.tepco.co.jp/decommission/planaction/monitoring/index-j.html>

セシウム-134 : 3.3 (H25/10/17) → ND(0.34) 1/9以下  
 セシウム-137 : 9.0 (H25/10/17) → 0.40 1/20以下  
 全ベータ : **74** (H25/ 8/19) → ND(17) 1/4以下  
 トリチウム : 67 (H25/ 8/19) → ND(1.8) 1/30以下

セシウム-134 : ND(0.59)  
 セシウム-137 : 0.78  
 全ベータ : ND(16)  
 トリチウム : ND(1.7) ※

セシウム-134 : 3.3 (H25/12/24) → ND(0.60) 1/5以下  
 セシウム-137 : 7.3 (H25/10/11) → 0.91 1/8以下  
 全ベータ : **69** (H25/ 8/19) → ND(16) 1/4以下  
 トリチウム : 68 (H25/ 8/19) → ND(1.7) 1/40以下

セシウム-134 : 4.4 (H25/12/24) → ND(0.30) 1/10以下  
 セシウム-137 : **10** (H25/12/24) → ND(0.37) 1/20以下  
 全ベータ : **60** (H25/ 7/ 4) → ND(17) 1/3以下  
 トリチウム : 59 (H25/ 8/19) → ND(1.8) 1/30以下

セシウム-134 : 3.5 (H25/10/17) → ND(0.23) 1/10以下  
 セシウム-137 : 7.8 (H25/10/17) → ND(0.38) 1/20以下  
 全ベータ : **79** (H25/ 8/19) → ND(17) 1/4以下  
 トリチウム : 60 (H25/ 8/19) → ND(1.8) 1/30以下

セシウム-134 : 5.0 (H25/12/2) → ND(0.28) 1/10以下  
 セシウム-137 : 8.4 (H25/12/2) → ND(0.27) 1/30以下  
 全ベータ : **69** (H25/8/19) → ND(17) 1/4以下  
 トリチウム : 52 (H25/8/19) → ND(1.8) 1/20以下

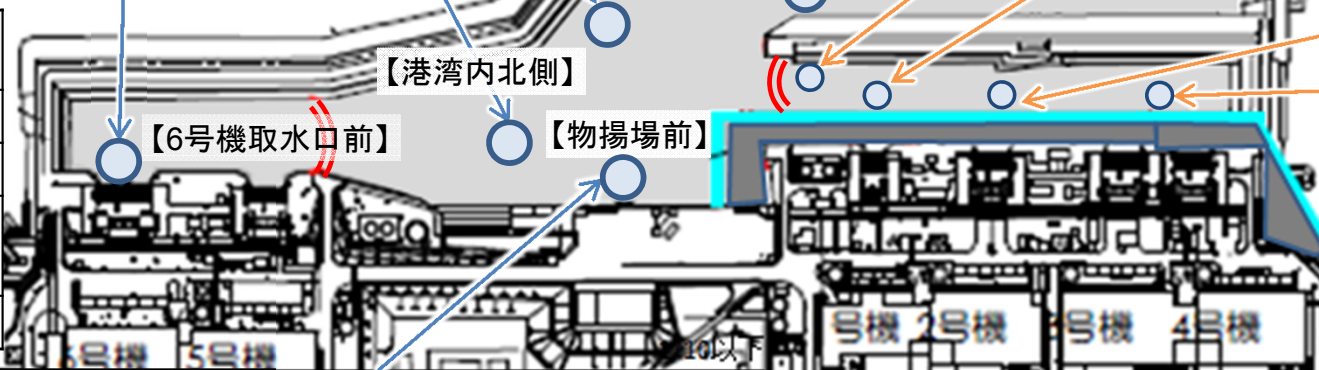
セシウム-134 : **32** (H25/10/11) → ND(0.54) 1/50以下  
 セシウム-137 : **73** (H25/10/11) → 3.4 1/20以下  
 全ベータ : **320** (H25/ 8/12) → 17 1/10以下  
 トリチウム : 510 (H25/ 9/ 2) → 9.1 1/50以下  
 シルトフェンスの位置変更により、H29.2.11から試料採取地点を南に50m移動

セシウム-134 : 2.8 (H25/12/2) → ND(0.48) 1/5以下  
 セシウム-137 : 5.8 (H25/12/2) → 0.80 1/7以下  
 全ベータ : **46** (H25/8/19) → ND(17) 1/2以下  
 トリチウム : 24 (H25/8/19) → ND(2.2) 1/10以下

セシウム-134 : ND(0.58)  
 セシウム-137 : 3.4  
 全ベータ : ND(17)  
 トリチウム : 9.7 ※

セシウム-134 : ND(0.70)  
 セシウム-137 : 3.3  
 全ベータ : ND(17)  
 トリチウム : 12 ※

	法定濃度	WHO飲料水ガイドライン
セシウム134	60	10
セシウム137	90	10
ストロンチウム90 (全ベータ値と強い相関)	30	10
トリチウム	6万	1万



セシウム-134 : ND(0.66)  
 セシウム-137 : 3.7  
 全ベータ : ND(17)  
 トリチウム : 18 ※

※のモニタリングはH26年3月以降開始  
 海側遮水壁の内側は埋め立てによりモニタリング終了

セシウム-134 : 5.3 (H25/8/ 5) → ND(0.51) 1/10以下  
 セシウム-137 : 8.6 (H25/8/ 5) → ND(0.48) 1/10以下  
 全ベータ : **40** (H25/7/ 3) → ND(17) 1/2以下  
 トリチウム : 340 (H25/6/26) → ND(1.7) 1/200以下

注: 海水の全ベータ測定値には、天然のカリウム40(12ベクレル/リットル程度)によるものが含まれている。また、ストロンチウム90と放射平衡となるイットリウム90の寄与が含まれる

H30年3月28日までの  
 東電データまとめ



# 港湾外近傍における海水モニタリングの状況 (H25年の最高値と直近の比較)

(直近値  
3/19 - 3/27採取)

	法定濃度	WHO飲料水ガイドライン
セシウム134	60	10
セシウム137	90	10
ストロンチウム90 (全ベータ値と強い相関)	30	10
トリチウム	6万	1万

単位(ベクレル/リットル)、検出限界値未満の場合はNDと表記し、( )内は検出限界値、ND(H25)はH25年中継続してND

## 【港湾口北東側(沖合1km)】

セシウム-134 : ND (H25) → ND(0.69)  
 セシウム-137 : ND (H25) → ND(0.50)  
 全ベータ : ND (H25) → ND(18)  
 トリチウム : ND (H25) → ND(1.9)

## 【港湾口東側(沖合1km)】

セシウム-134 : ND (H25) → ND(0.62)  
 セシウム-137 : 1.6 (H25/10/18) → ND(0.81)  
 全ベータ : ND (H25) → ND(18)  
 トリチウム : 6.4 (H25/10/18) → ND(1.9) 1/3以下

## 【港湾口南東側(沖合1km)】

セシウム-134 : ND (H25) → ND(0.59)  
 セシウム-137 : ND (H25) → ND(0.72)  
 全ベータ : ND (H25) → ND(18)  
 トリチウム : ND (H25) → ND(1.9)

セシウム-134 : ND (H25) → ND(0.76)  
 セシウム-137 : ND (H25) → ND(0.80)  
 全ベータ : ND (H25) → ND(18)  
 トリチウム : 4.7 (H25/8/18) → ND(1.9) 1/2以下

## 【北防波堤北側(沖合0.5km)】

## 【港湾口】

セシウム-134 : 3.3 (H25/12/24) → ND(0.60) 1/5以下  
 セシウム-137 : 7.3 (H25/10/11) → 0.91 1/8以下  
 全ベータ : **69** (H25/ 8/19) → ND(16) 1/4以下  
 トリチウム : 68 (H25/ 8/19) → ND(1.7) 1/40以下

## 【南防波堤南側(沖合0.5km)】

セシウム-134 : ND (H25) → ND(0.87)  
 セシウム-137 : ND (H25) → ND(0.64)  
 全ベータ : ND (H25) → ND(18)  
 トリチウム : ND (H25) → ND(1.9)

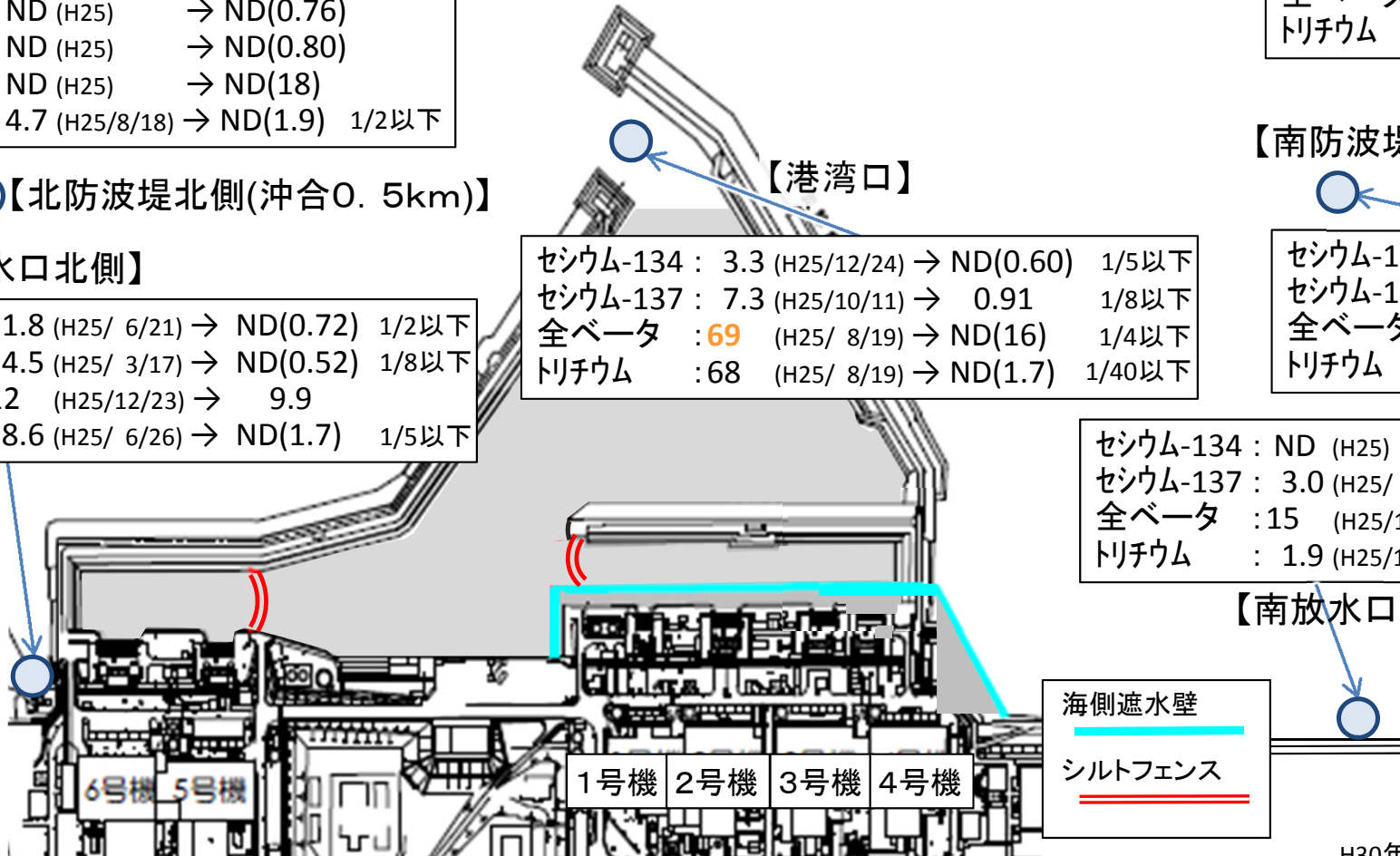
## 【5,6号機放水口北側】

セシウム-134 : 1.8 (H25/ 6/21) → ND(0.72) 1/2以下  
 セシウム-137 : 4.5 (H25/ 3/17) → ND(0.52) 1/8以下  
 全ベータ : 12 (H25/12/23) → 9.9  
 トリチウム : 8.6 (H25/ 6/26) → ND(1.7) 1/5以下

セシウム-134 : ND (H25) → ND(0.66)  
 セシウム-137 : 3.0 (H25/ 7/15) → ND(0.68) 1/4以下  
 全ベータ : 15 (H25/12/23) → 8.5  
 トリチウム : 1.9 (H25/11/25) → ND(1.4)

【南放水口付近】注: H28年台風10号の影響により、試料採取地点の安全が確保できないため、1~4号機放水口から南側約330mの地点で採取。さらに、H29.1.27から同放水口から南側約280m地点で、H30.3.23からは約320m地点で採取。

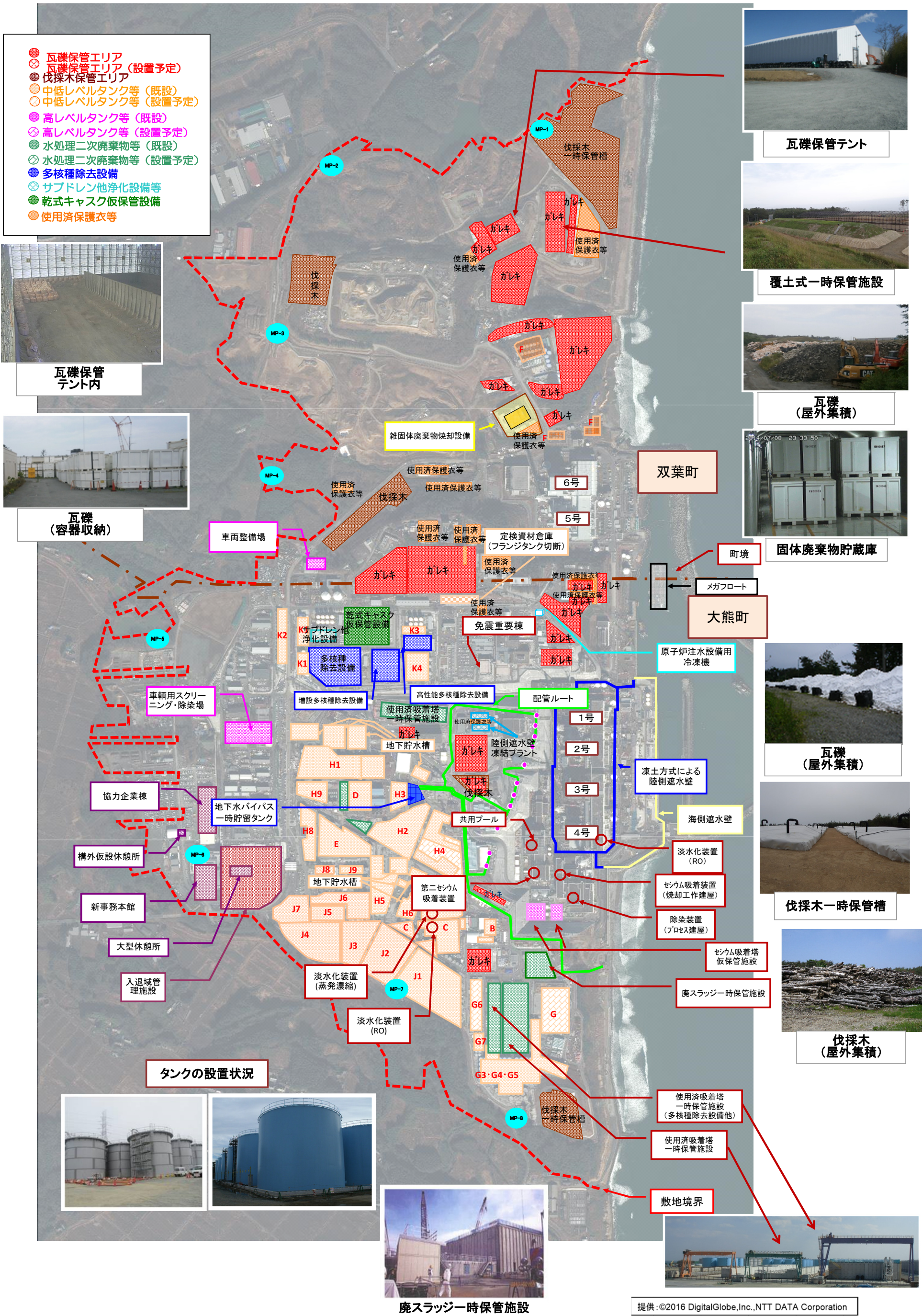
注: 海水の全ベータ測定値には、天然のカリウム40(12ベクレル/リットル程度)によるものが含まれている。また、ストロンチウム90と放射平衡となるイットリウム90の寄与が含まれる





# 東京電力ホールディングス（株） 福島第一原子力発電所 構内配置図

添付資料2  
2018年3月29日





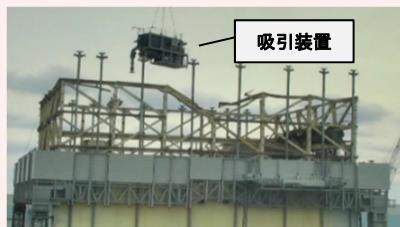
廃止措置等に向けた進捗状況:使用済み燃料プールからの燃料取り出し作業

至近の目標 1～3号機使用済み燃料プール内の燃料の取り出し開始

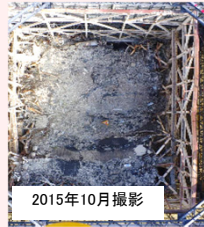
1号機

1号機使用済み燃料プールからの燃料取り出しについては、原子炉建屋最上階（オペフロ）の上部に、燃料取り出し専用カバーを設置する計画。2016/11/10、建屋カバーの全ての屋根パネル・壁パネルの取り外し完了。2017/5/11、建屋カバーの柱・梁の取り外し完了。2017/12/19、建屋カバーの柱・梁の改造及び防風フェンスの設置を完了。

オペフロ北側のガレキ撤去を2018/1/22から開始。吸引装置によるガレキ撤去作業を慎重に進めており、放射線物質濃度を監視している敷地境界付近や構内のダストモニタに有意な変動がないことを確認。



<進捗状況(1/22撮影)>



2015年10月撮影



2017年11月撮影

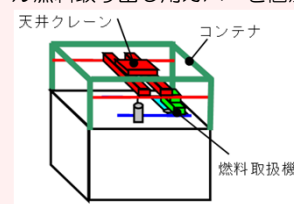
ガレキ撤去範囲  
(北側)

<オペフロの状況>

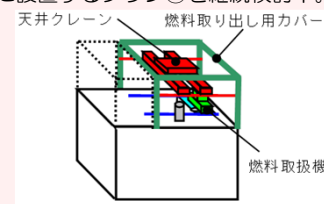
2号機

2号機使用済み燃料プール内燃料・燃料デブリの取り出しに向け、既存の原子炉建屋上部の解体・改造範囲について検討。作業の安全性、敷地外への影響、早期に燃料を取り出しリスクを低減させる観点を考慮し、原子炉建屋最上階より上部の全面解体が望ましいと判断。

プール燃料と燃料デブリの取り出し用コンテナを共用するプラン①とプール燃料取り出し用カバーを個別に設置するプラン②を継続検討中。



プラン①イメージ図



プラン②イメージ図

3号機

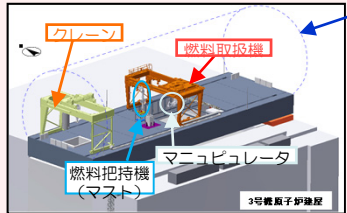
燃料取り出し用カバー設置に向けて、プール内大型ガレキ撤去作業が2015年11月に完了。安全・着実に燃料取り出しを進めるために、現場に設置する燃料取扱設備を用いて、工場にて遠隔操作訓練を実施（2015年2月～12月）。原子炉建屋最上階の線量低減対策（除染、遮へい）を、2016年12月に完了。

2017年1月より燃料取り出し用カバー・燃料取扱設備の設置作業を実施。2018/2/23燃料取り出し用カバー設置完了。

引き続き、2018年度中頃の燃料取り出しに向けて、安全を最優先に作業を進める。



ドーム屋根設置状況 (2/21撮影)



カバー内部燃料取扱設備 全体イメージ

4号機

中長期ロードマップでは、ステップ2完了から2年以内（～2013/12）に初号機の使用済み燃料プール内の燃料取り出し開始を第1期の目標としてきた。

2013/11/18より初号機である4号機の使用済み燃料プール内の燃料取り出しを開始し、第2期へ移行した。

燃料取り出し作業開始から1年以内となる2014/11/5に、プール内の使用済み燃料1,331体の共用プールへの移送が完了した。残りの新燃料の6号機使用済み燃料プールへの移送は、2014/12/22に完了。（新燃料2体については燃料調査のため2012/7に先行して取り出し済）

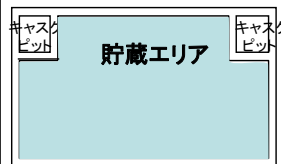
これにより、4号機原子炉建屋からの燃料取り出しが完了した。今回の経験を活かし1～3号機のプール燃料取り出しに向けた作業を進める。

※写真の一部については、核物質防護などに関わる機微情報を含むことから修正しております。



燃料取り出し状況

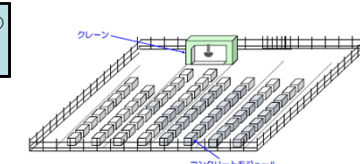
共用プール



共用プール内空きスペースの確保  
(乾式カスク仮保管設備への移送)

- 現在までの作業状況
- 燃料取扱いが可能な状態まで共用プールの復旧が完了 (2012/11)
  - 共用プールに保管している使用済み燃料の乾式カスクへの装填を開始 (2013/6)
  - 4号機使用済み燃料プールから取り出した使用済み燃料を受入 (2013/11～2014/11)

乾式カスク(※2)  
仮保管設備



共用プールからの使用済み燃料受け入れ

2013/4/12より運用開始、カスク保管建屋より既設乾式カスク全9基の移送完了(2013/5/21)、共用プール保管中燃料を順次移送中。

<略語解説>

(※1)オペレーティングフロア(オペフロ):  
 定期検査時に、原子炉上蓋を開放し、炉内燃料取替や炉内構造物の点検等を行うフロア。  
 (※2)カスク:放射性物質を含む試料・機器等の輸送容器の名称

**至近の目標** プラントの状況把握と燃料デブリ取り出しに向けた研究開発及び除染作業に着手

**1号機原子炉建屋TIP室調査**

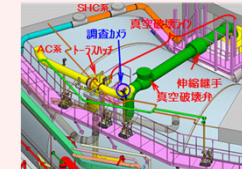
- PCV内部調査のための環境改善その他を目的とし、TIP<sup>(※1)</sup>室調査を2015/9/24~10/2に実施。  
 (TIP室は部屋の入り口周辺が高線量のため、線量の低いタービン建屋通路から壁面を穿孔して線量率・汚染分布等を調査)
- 調査の結果、X-31~33ペネ<sup>(※2)</sup>(計装ペネ)が高線量、そのほかは低線量であった。
- TIP室内での作業が可能ない見込みがあることを確認したことから、今後、TIP室内作業を行うために障害となる干渉物等の洗い出しや線量低減計画の策定を進める。

**圧力抑制室(S/C<sup>(※3)</sup>)上部調査による漏えい箇所確認**

1号機S/C上部の漏えい箇所を2014/5/27より調査し、上部にある配管の内1本の伸縮継手カバーより漏えいを確認。他の箇所からの漏えいは確認されず。今後、格納容器の止水・補修に向けて、具体的な方法を検討していく。



漏えい箇所

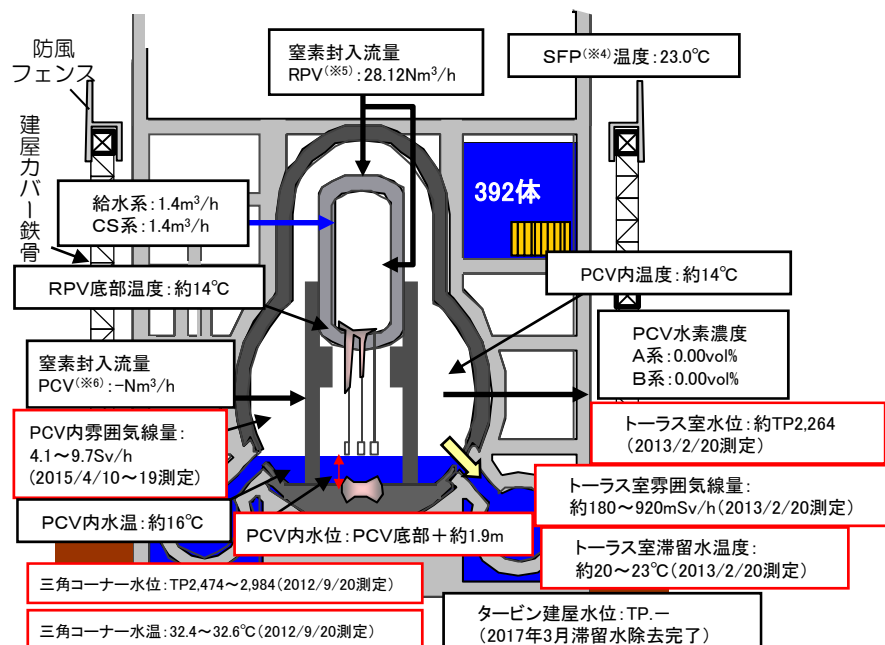


S/C上部調査イメージ図

**1号機**

原子炉建屋

原子炉建屋内雰囲気線量:  
 最大5.150mSv/h(1階南東エリア)(2012/7/4測定)

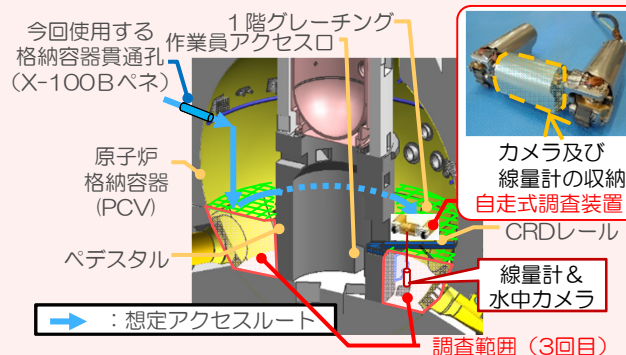


**格納容器内部調査の状況**

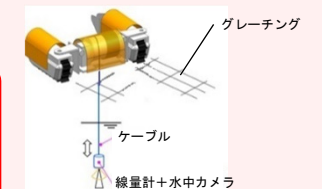
燃料デブリ取り出しに先立ち、燃料デブリの位置等格納容器内の状況把握のため、内部調査を実施。

【調査概要】

- 2015年4月に、狭隘なアクセスロ(内径φ100mm)から格納容器内へ進入し、格納容器1階内部の映像、空間線量等の情報を取得。
- 2017年3月、ベスタル外地下階へのデブリの広がり調査するため、自走式調査装置を用いた調査を実施し、PCV底部の状況を初めて撮影。得られた画像データと線量データを元に、PCV内部の状況を継続検討していく。



格納容器内調査イメージ



線量計、カメラ吊り降ろしイメージ



最下点近傍の画像

**ミュオン測定による炉内燃料デブリ位置把握**

期間	評価結果
2015.2~5	炉心部に大きな燃料がないことを確認。

<略語解説>  
 (※1) TIP (Traversing In-core Probe): 移動式炉心内計測装置。  
 (※2) ペネ: ペネトレーションの略。格納容器等にある貫通部。  
 (※3) S/C (Suppression Chamber): 圧力抑制プール。非常用炉心冷却系の水源等として使用。  
 (※4) SFP (Spent Fuel Pool): 使用済燃料プール。  
 (※5) RPV (Reactor Pressure Vessel): 原子炉圧力容器。  
 (※6) PCV (Primary Containment Vessel): 原子炉格納容器。

※プラント関連パラメータは2018年3月28日11:00現在の値

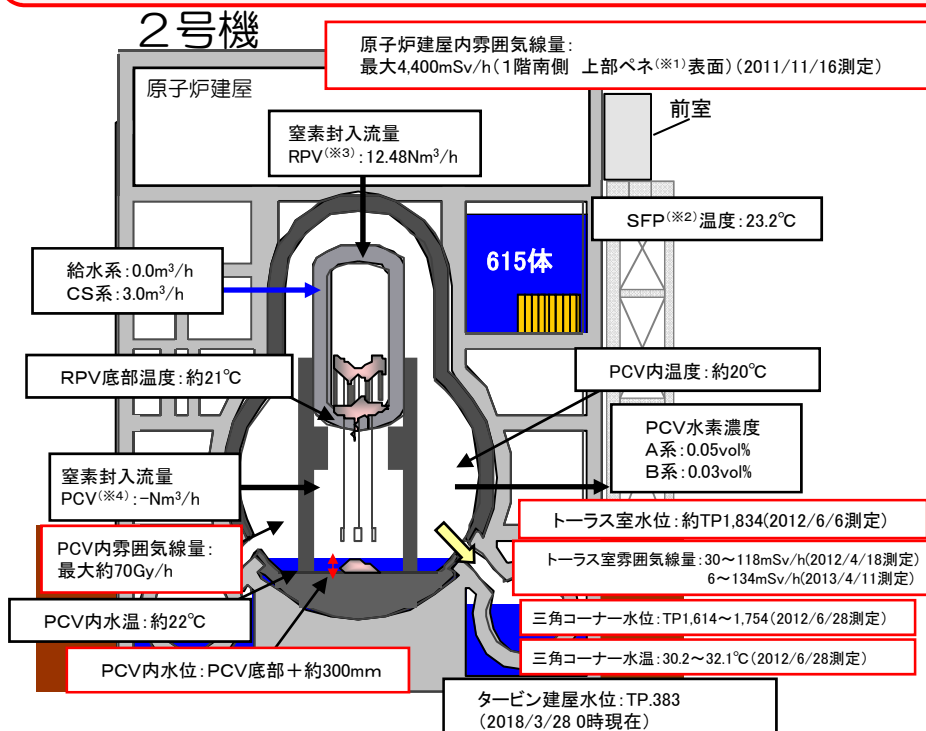
	1回目 (2012/10)	2回目 (2015/4)	3回目 (2017/3)
PCV内部調査実績	<ul style="list-style-type: none"> <li>映像取得</li> <li>雰囲気温度、線量測定</li> <li>水位、水温測定</li> <li>滞留水の採取</li> <li>常設監視計器設置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>PCV1階の状況確認</li> <li>映像取得</li> <li>雰囲気温度、線量測定</li> <li>常設監視計器交換</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>PCV地下1階の状況確認</li> <li>映像取得</li> <li>線量測定</li> <li>堆積物の採取</li> <li>常設監視計器交換</li> </ul>
PCVからの漏えい箇所	<ul style="list-style-type: none"> <li>PCVベント管真空破壊ラインベローズ部(2014/5確認)</li> <li>サンドクッションドレンライン(2013/11確認)</li> </ul>		



**至近の目標** プラントの状況把握と燃料デブリ取り出しに向けた研究開発及び除染作業に着手

原子炉圧力容器温度計・原子炉格納容器常設監視計器の設置

- ①原子炉圧力容器温度計再設置
  - 震災後に2号機に設置したRPV底部温度計が2014年2月に破損したことから監視温度計より除外。
  - 2014年4月に温度計の引き抜き作業を行ったが、引き抜けなかったため作業を中断。錆除去剤を注入し、2015年1月に引抜完了。3月に温度計の再設置完了。4月より監視対象計器として使用。
- ②原子炉格納容器温度計・水位計再設置
  - 格納容器常設監視計器の設置を試みたが、既設グレーチングとの干渉により、計画の位置に設置することが出来なかった(2013年8月)。2014年5月に当該計器を引き抜き、2014年6月に再設置を実施。1ヶ月程度推移を確認し妥当性を確認。
  - 再設置時に格納容器内の水位を測定し、底部より約300mmの高さまで水があることを確認。

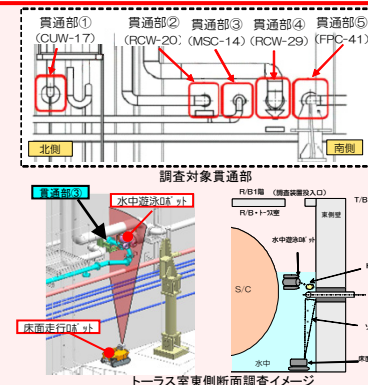


※プラント関連パラメータは2018年3月28日11:00現在の値

PCV内部調査実績	1回目 (2012/1)	・映像取得 ・雰囲気温度測定
	2回目 (2012/3)	・水面確認 ・水温測定 ・雰囲気線量測定
	3回目 (2013/2~2014/6)	・映像取得 ・水位測定 ・滞留水の採取 ・常設監視計器設置
	4回目 (2017/1~2)	・映像取得 ・雰囲気線量測定 ・雰囲気温度測定
PCVからの漏えい箇所	・トラス室上部漏えい無 ・S/C内側・外側全周漏えい無	

トラス室壁面調査結果

- トラス室壁面調査装置(水中遊泳ロボット、床面走行ロボット)を用いて、トラス室壁面の(東壁面北側)を対象に調査。
- 東側壁面配管貫通部(5箇所)の「状況確認」と「流れの有無」を確認する。
- 水中壁面調査装置(水中遊泳ロボット及び床面走行ロボット)により貫通部の状況確認ができることを実証。
- 貫通部①~⑤について、カメラにより、散布したトレーサ※5を確認した結果、貫通部周辺での流れは確認されず。(水中遊泳ロボット)
- 貫通部③について、ソナーによる確認の結果、貫通部周辺での流れは確認されず。(床面走行ロボット)



格納容器内部調査の状況

- 燃料デブリ取り出しに先立ち、燃料デブリの位置等格納容器内の状況把握のため、内部調査を実施。
- 【調査概要】
- 2号機X-6ベネ※1貫通口からロボットを投入し、CRDレールを利用しベDESTAL内にアクセスして調査。
- 【進捗状況】
- 2017/1/26,30に格納容器貫通部からカメラを挿入し、ロボットが走行するCRD交換用レールの状況を確認。2/9に自走式調査装置アクセスルート上の堆積物除去を実施し、2/16に自走式調査装置を用いた格納容器内部調査を実施。
  - 一連の調査で、ベDESTAL内のグレーチングの脱落や変形、ベDESTAL内に多くの堆積物があることを確認。
  - 2018年1月19日に、原子炉格納容器の内部調査を実施。今回調査では、前回の調査(2017年1月~2月)で使用した、テレスコピック式調査装置を改良し、プラットホーム下の状況を確認。調査の結果、ベDESTAL底部に燃料集合体の一部の落下を確認したことから、その周辺に確認された堆積物は、燃料デブリであると推定。今後、取得した画像の分析を行う予定。



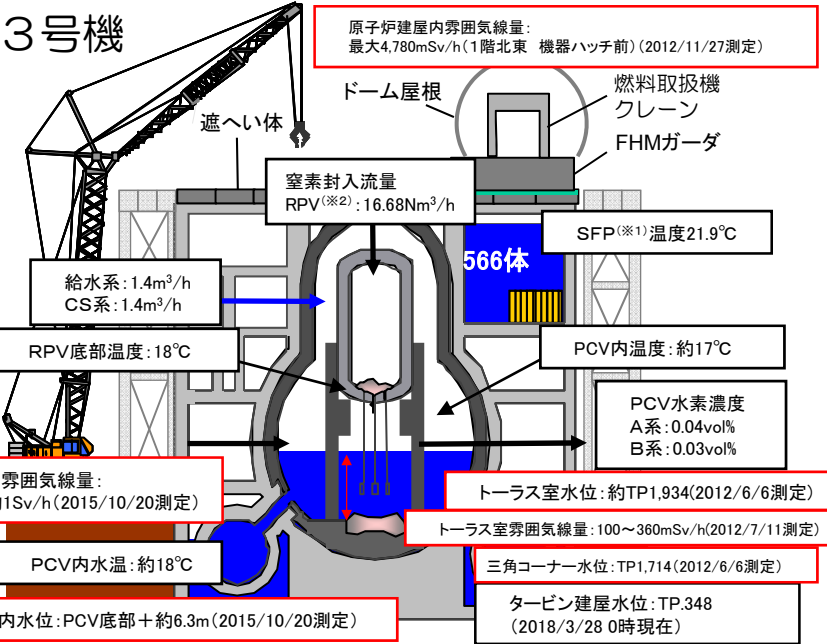
ミュオン測定による炉内燃料デブリ位置把握

期間	評価結果
2016.3~7	圧力容器底部及び炉心下部、炉心外周域に燃料デブリと考えられる高密度の物質が存在していることを確認。燃料デブリの大部分が圧力容器底部に存在していると推定。

<略語解説>  
 ※1)ベネ:ベネトレーションの略。格納容器等にある貫通部。 ※2)SFP(Spent Fuel Pool):使用済燃料プール。 ※3)RPV(Reactor Pressure Vessel):原子炉圧力容器。 ※4)PCV(Primary Containment Vessel):原子炉格納容器。 ※5)トレーサ:流体の流れを追跡するために使用する物質。粘土系粒子。

**至近の目標** プラントの状況把握と燃料デブリ取り出しに向けた研究開発及び除染作業に着手

**主蒸気隔離弁※室からの流水確認**  
 3号機原子炉建屋1階北東エリアの主蒸気隔離弁室の扉付近から、近隣の床ドレンファンネル（排水口）に向かって水が流れていることを2014/1/18に確認。排水口は原子炉建屋地下階につながっており、建屋外への漏えいはない。  
 2014/4/23より、原子炉建屋2階の空調機械室から1階の主蒸気隔離弁室につながっている計器用配管から、カメラによる映像取得、線量測定を実施。2014/5/15に主蒸気配管のうち1本の伸縮継手周辺から水が流れていることを確認した。  
 3号機で、格納容器からの漏えい箇所が判明したのは初めてであり、今回の映像から、漏えい量の評価を行うとともに、追加調査の可否を検討する。また、本調査結果をPCV止水・補修方法の検討に活用する。  
※主蒸気隔離弁：原子炉から発生した蒸気を緊急時に止める弁



※プラント関連パラメータは2018年3月28日11:00現在の値

PCV内部調査実績	1回目 (2015/10~2015/12)	<ul style="list-style-type: none"> <li>映像取得</li> <li>水位、水温測定</li> <li>常設監視計器設置 (2015/12)</li> <li>雰囲気温度、線量測定</li> <li>滞留水の採取</li> </ul>
	2回目 (2017/7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>映像取得</li> <li>常設監視計器交換 (2017/8)</li> </ul>
PCVからの漏えい箇所	主蒸気配管ペローズ部 (2014/5確認)	

**3号機原子炉格納容器機器ハッチ 小型調査装置による調査結果**

- 燃料デブリ取り出しに向けた原子炉格納容器調査の一環として、3号機原子炉格納容器(PCV)機器ハッチの周辺について、2015/11/26に小型調査装置を用いて詳細調査を実施。
- 格納容器内水位より下部にあたる機器ハッチ周辺にて、錆などの汚れが確認されたため、シール部からにじみ程度の漏えいの可能性が考えられる。

同様のシール構造である他の格納容器貫通部も含め、調査・補修方法を検討する。

調査装置の構成要素：  
 80° 照射可能、カメラレンズ部、LED照明、スマートフォン、PCV水位 (0.9711800)、機器ハッチ枠架台開閉機(白)

写真中のラベル：  
 天井側シール部汚れなし、ハッチ右側シール部：PCV内水位付近から水に汚れて錆等の汚れあり、80° 照射可能、カメラレンズ部、LED照明、スマートフォン、PCV水位 (0.9711800)、機器ハッチ枠架台開閉機(白)

**格納容器内部調査の実施**

燃料デブリ取り出しに先立ち、燃料デブリの位置等格納容器内の状況把握のため、内部調査を実施。

【調査概要】

- PCV内部調査用に予定しているX-53ベネ(※4)の水没確認を遠隔超音波探傷装置を用いて調査を実施し、水没していないことを確認(2014/10/22~24)。
- PCV内を確認するため、2015/10/20、22にX-53ベネから格納容器内部へ調査装置を入れ、映像、線量、温度の情報を取得、内部の滞留水を採取。格納容器内の構造物・壁面に損傷は確認されず、水位は推定値と一致しており、内部の線量は他の号機に比べて低いことを確認。
- 2017年7月に、水中ROV(水中遊泳式遠隔調査装置)を用いて、ペDESTAL内の調査を実施。
- 調査で得られた画像データの分析を行い、複数の構造物の損傷や炉内構造物と推定される構造物を確認。引き続き、得られた情報を基に、燃料取り出しの検討を進めます。

調査装置の構成要素：  
 観測に使用する格納容器貫通孔(X-53ベネ)、格納容器貫通孔(X-6ベネ)、CRDレーザ、水中ROV、CRDハウジング下部、ペDESTAL、スロット開口部、プラットフォーム地下階、CRDハウジング下部、プラットフォーム近傍、ペDESTAL内

ペDESTAL内部の状況

**ミュオン測定による炉内燃料デブリ位置把握**

期間	評価結果
2017.5~9	もともと燃料が存在していた炉心域に大きな塊は存在しないこと、原子炉圧力容器底部に一部燃料デブリが存在している可能性があることを評価。

<略語解説>  
 (※1) SFP(Spent Fuel Pool)：使用済燃料プール。 (※2) RPV(Reactor Pressure Vessel)：原子炉圧力容器。  
 (※3) PCV(Primary Containment Vessel)：原子炉格納容器。 (※4) ベネ：ペネトレーションの略。格納容器等にある貫通部。



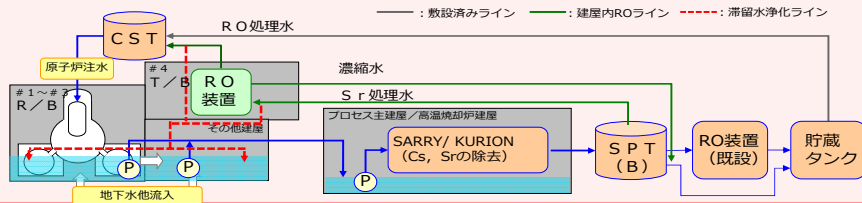
# 廃止措置等に向けた進捗状況：循環冷却と滞留水処理ライン等の作業

## 至近の目標 原子炉冷却、滞留水処理の安定的継続、信頼性向上

### 循環注水冷却設備・滞留水移送配管の信頼性向上

- 3号機復水貯蔵タンク（CST）を水源とする原子炉注水系の運用を開始（2013/7/5～）。従来に比べて、水源の保有水量の増加、耐震性向上等、原子炉注水系の信頼性が向上。
- 汚染水の漏えいリスクを低減するため、淡水化（RO）装置を4号機タービン建屋に設置。汚染水の移送、水処理、原子炉注水を行う循環ループを縮小する。新設したRO装置は10/7運転開始し、10/20より24時間運転。RO装置を建屋内に新設することにより、循環ループは約3kmから約0.8km\*に縮小。
- 建屋滞留水中の放射性物質の低減を加速させるため、2月22日に3・4号機側の建屋滞留水の循環浄化を開始。
- 循環浄化では、水処理装置出口ラインから分岐する配管（滞留水浄化ライン）を新たに設置し、水処理設備で浄化した処理水を1号機原子炉建屋及び2～4号機タービン建屋へ移送。
- 引き続き、建屋滞留水の貯蔵量低減と併せて建屋滞留水のリスク低減に努める。
- 1・2号機の循環浄化は4月に運用開始予定。

\*：汚染水移送配管全体は、余剰水の高台へのライン（約1.3km）を含め、約2.1km



### フランジタンク解体の進捗状況

- フランジタンクのリブレースに向け、H1東/H2エリアにて2015年5月よりフランジタンクの解体に着手し、H1東エリアのフランジタンク（全12基）の解体が2015年10月に、H2エリアのフランジタンク（全28基）の解体が2016年3月に、H4エリアのフランジタンク（全56基）の解体が2017年5月に、H3・Bエリアのフランジタンク（全31基）の解体が2017年9月に完了。H5、H6エリアのフランジタンク解体を実施中。



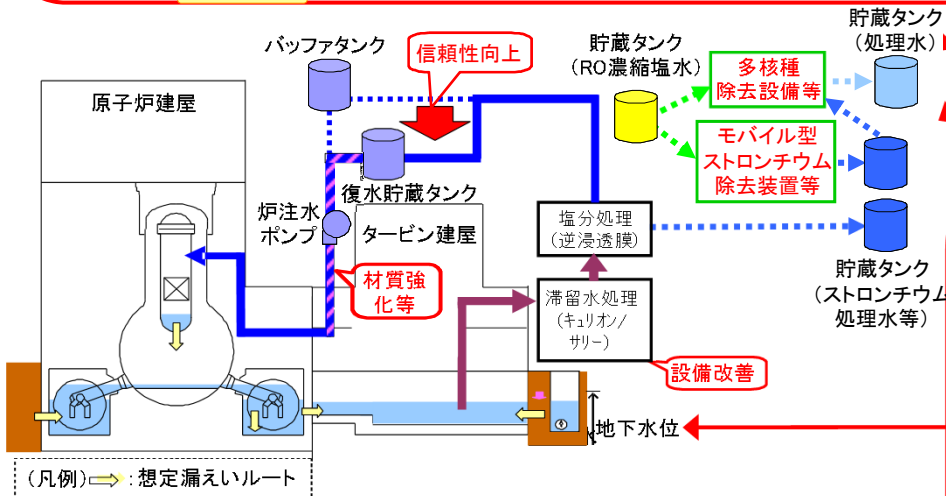
H1東エリア解体開始時の様子



H1東エリア解体後の様子

### 汚染水（RO濃縮塩水）の処理完了

多核種除去設備（ALPS）等7種類の設備を使い、汚染水（RO濃縮塩水）の処理を進め、タンク底部の残水を除き、2015/5/27に汚染水の処理が完了。なお、タンク底部の残水については、タンク解体に向けて順次処理を進める。また、多核種除去設備以外で処理したストロンチウム処理水については、多核種除去設備で再度浄化し、更なるリスク低減を図る。

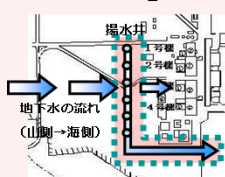


### 原子炉建屋への地下水流入抑制



サブドレン水を汲み上げることによる地下水流入の抑制  
 建屋へ流れ込む地下水の量を減らすため、建屋周辺の井戸（サブドレン）からの地下水のくみ上げを2015/9/3より開始。くみ上げた地下水は専用の設備により浄化し、水質が運用目標未満であることを東京電力及び第三者機関にて確認した上で排水。

### 地下水バイパスにより、建屋付近の地下水位を低下させ、建屋への地下水流入を抑制

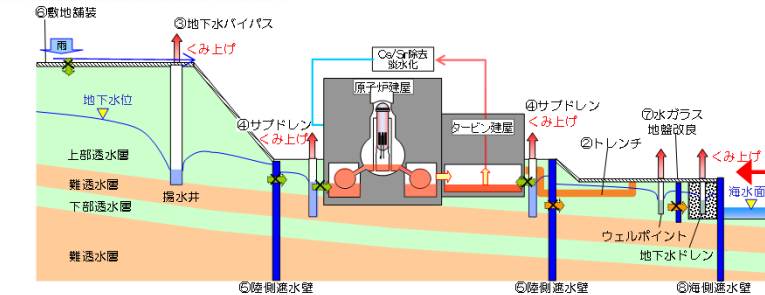


山側から流れてきた地下水を建屋の上流で揚水し、建屋内への地下水流入量を抑制する取組（地下水バイパス）を実施。くみ上げた地下水は一時的にタンクに貯留し、東京電力及び第三者機関により、運用目標未満であることを都度確認し、排水。揚水井、タンクの水質について、定期的にモニタリングを行い、適切に運用。建屋と同じ高さで設置した観測孔において地下水位の低下傾向を確認。建屋への地下水流入をこれまでのデータから評価し、減少傾向を確認。

### 1～4号機建屋周りに凍土方式の陸側遮水壁を設置し、建屋への地下水流入を抑制



建屋への地下水流入を抑制するため、建屋を囲む陸側遮水壁の設置を計画。2016年3月より海側及び山側の一部、2016年6月より山側の95%の範囲の凍結を開始。残りの箇所についても段階的に凍結を進め、2017年8月に全ての箇所の凍結を開始。2018年3月、陸側遮水壁はほぼ全ての範囲で地中温度が0℃を下回ると共に、山側では4～5mの内外水位差が形成され、深部の一部除き完成し、サブドレン・フェーシング等との重層的な汚染水対策により地下水位を安定的に制御し、建屋に地下水を近づけない水位管理システムが構築されたと判断。また、3月7日に開催された汚染水処理対策委員会にて、これらの評価結果に基づき、陸側遮水壁が効果を発揮していることを確認。



# 廃止措置等に向けた進捗状況:敷地内の環境改善等の作業

## 至近の目標

- ・発電所全体からの追加的放出及び事故後に発生した放射性廃棄物(水処理二次廃棄物、ガレキ等)による放射線の影響を低減し、これらによる敷地境界における実効線量1mSv/年未満とする。
- ・海洋汚染拡大防止、敷地内の除染

## 放射線防護装備の適正化

福島第一原子力発電所敷地内の環境線量低減対策の進捗を踏まえて、1～4号機建屋周辺等の汚染の高いエリアとそれ以外のエリアを区分し、各区分に応じた防護装備の適正化を行うことにより、作業時の負荷軽減による安全性と作業性の向上を図る。

2016年3月より限定的に運用を開始。2017年3月、9月にGzoneを拡大。



R zone (アナラックエリア)	Y zone (カバーオールエリア)	G zone (一般作業エリア)
全面マスク 	全面マスク 又は 平面マスク ※1※2 	使い捨て防護マスク 
カバーオールの上にアナラック 	カバーオール 	一般作業服※3 構内寺用服 

※1 又はカバーオール2重

※1 本施設設備(多核燃料棒取出装置等)敷地内の作業(顧客等)は、全面マスクを着用する。  
 ※2 濃縮廃液、S-処理水を含む放射性物質の作業(濃縮廃液保管エリア)は、全面マスクを着用しない作業。カバーオール、作業計画時の取組調査、顧客等との接触及びタンク移送ラインに隣接する作業時は、全面マスクを着用する。  
 ※3 特定の軽作業(カバーオール、監視業務、構外からの持ち込み物品の運搬等)



## 線量率モニタの設置

福島第一構内で働く作業員の方が、現場状況を正確に把握しながら作業できるように、2016/1/4までに合計86台の線量率モニタを設置。

これにより、作業する場所の線量率を、その場でリアルタイムに確認可能となった。

また、免震重要棟および入退域管理棟内の大型ディスプレイで集約して確認可能となった。



線量率モニタの設置状況

## 海側遮水壁の設置工事

汚染された地下水の海洋への流出を防ぐため、海側遮水壁を設置。

2015/9/22に鋼管矢板の打設が完了した後、引き続き、鋼管矢板の継手処理を行い、2015/10/26に海側遮水壁の継手処理を完了。これにより、海側遮水壁の閉合作業が終わり、汚染水対策が大きく前進した。



海側遮水壁 鋼管矢板打設完了状況

## 大型休憩所の状況

作業員の皆さまが休憩する大型休憩所を設置し、2015/5/31より運用を開始しています。

大型休憩所には、休憩スペースに加え、事務作業が出来るスペースや集合して作業前の安全確認が実施できるスペースを設けています。

大型休憩所内において、2016/3/1にコンビニエンスストアが開店、4/11よりシャワー室が利用可能となりました。作業員の皆さまの利便性向上に向け、引き続き取り組みます。

